「アビラケツノミコトになれ――」

突如、麻原彰晃に訪れた啓示が、オウム真理教による破壊的活動の原点になりました。

一九八五年五月、神奈川県三浦海岸。麻原は解脱・悟りの成就を発願し、頌陀を行っていました。頌陀とは、この世に対する執着を禁欲的生活によって絶つ仏道です。恐らくは粗衣をまとい、野宿をしながら、修行に勤しむ日々だったことでしょう。

そのようなある日、麻原は神を礼拝していました。立位の姿勢から五体を大地に投げ出しての礼拝を繰り返す、仏教の伝統的な修行です。そのとき麻原は、天から降りてきた神の言葉を聞いたのです。言葉の意味を調べたところ、「アビラケツ」はサンスクリット語であり、アビラケツノミコトは「神軍を率いる光の命――戦いの中心となる者」[*1]のことでした。神は麻原に、西暦二一〇〇年から二二〇〇年頃にシャンバラが地上に興ることを告げ、その実現のためにアビラケツノミコトとして戦うように命じたのです。[*2]

そのときでした。シャンバラ建国の意志が、麻原の脳裏に刻印されたのは。そして、その意志の実現こそが、麻原が信徒に対して破壊的活動を指示した目的だったのです。

この破壊的活動について麻原は、ヴァジラヤーナの教義に基づく現代人の救済、すなわち「ヴァジラヤーナの救済」として説きました。現代人は悪業をなしているために必ず、来世は三悪趣[*3]に転生する。かかる現代人を救済するには、武力を用いて地球上にオウム真理教の国家を樹立し、真理の実践をさせる以外の道はない。あるいは、「ポア」しかないと。[*4]

そして、麻原は一九九四年六月頃、自動小銃の製造に関する指示の際、私どもに述懐しました。

ヴァジラヤーナは、「アビラケツノミコトになれ」という啓示が始まりだった――。

麻原は啓示を体験した当時、オウム真理教の前身であるオウム神仙の会（以下、オウム）または教団と記します）を主宰していました。この会は古来のヨガ・仙道・大乗仏教・密教などの系統の修行をする集団でしたが、宗教団体はまだ名乗っていませんでした。会員数は、一九八五年一二月の時点でわずか一五人。

*1 シャンバラとは、聖人が住み、全宇宙の英智を有する幻の国。

*2 以上の麻原の啓示体験に関する記述は、『トワイライトゾーン』一九八五年一〇月号を参考にした。

*3 三悪趣とは、地獄・餓鬼・動物の三界。

*4 真理とは、精神を高める教えのことであり、オウム真理教の教義を指す。

*5 ポアとは救済の対象を、その生命を絶ち、より幸福な世界に転生させること。

*6 団体名と会員数は、警視庁作成資料による。当時の団体名は、オウムの会だったともいわれる。

麻原も、彼の主張する「最終解脱」は成就しておらず、修行途上でした。ですから麻原は会員にとって、先生ではあってもあくまでも人間であり、神のような絶対的な存在ではありませんでした。しかし、マンパワー*1も、財力も、政治力も、理想国家の建設と結びつくものは何もない状況において、それを着想するとは――。その後実際に、麻原はシャンバラ建国を実現すべく、教団を異例の速さで成長させていきました。

一九八六年　八月　麻原が最終解脱を主張、九月　出家制度発足
出家者数一五人、一〇月　東京本部移転　会員数約三五〇人

一九八七年　二月　大阪支部設立　会員数約六〇〇人、七月　オウム真理教と改称　東京本部移転　信徒数約九〇〇人、一〇月　福岡支部設立　信徒数約一三〇〇人、一一月　大阪支部移転　ニューヨーク支部設立、一二月　名古屋支部設立　信徒数約一五〇〇人

一九八八年　四月　札幌支部設立　出家者数約五〇人　信徒数約二〇〇〇人、八月　富士山総本部道場完成　出家者数約一〇〇人　信徒数約二五〇〇人、一一月　東京総本部道場設立　信徒数約三〇〇〇人、一二月　仙台支部・高知支部・金沢支部・広島支部・ボン支部設立

一九八九年　二月　京都支部設立、三月　名古屋支部移転　出家者数約二五〇人、六月　和歌山支部・横浜支部設立　八月　宗教法人登記、一二月　出家者数約四〇〇人

一九九〇年　二月　麻原ら教団関係者二五人が衆院選に出馬（全員落選）*2

そして麻原は、教団の武装化に動き、信徒に対して数々の破壊的行為を指示するに至ったのです。*3

しかし、神の言葉を聞くなどという夢のような体験が、麻原のあの途轍もない行動の動機となり得るのか？　そもそも、"現実"として受け止められ得るのか？　この種の体験の影響力について、疑問を抱かれるかもしれません。

ところが宗教的経験は、その経験者にとってはあくまでも現実として知覚され、場合によっては、経験者の人生をも一変させるほど*4

*1　当時、重大事件に関与した元信徒は入会していなかった。これらの元信徒の入会前に、武力による国家の建設を麻原は発意していた。

*2　年表の一部は、警視庁作成資料を参考にした。

*3　ただし武装化の開始前にも麻原は殺人などの違法行為を指示していた。

*4　ただし、その著作から判断すると、麻原は人生苦から解脱を志向し、仏教等を意識的に追求した結果、宗教的経験を現実として認識するに至ったと思われる。ある精神医学者は麻原に関して、W・ジェームズ『宗教的経験の諸相』岩波書店）による宗教心理学の立場から、「一度生まれ回心」者であり、特異な宗教体験によって回心した「二度生まれ回心」者とは考えられない旨を述べている。前者は「漸次的な回心」であり、自らの意志によって、宗教的な考え方や行動が少しずつ組み立てられる。後者は「突然の回心」であり、潜在意識の作用による不随意的な、瞬時に起こる考え方や行動の変化とされる。（次頁）

の影響力を秘めているのです。これは、宗教に関する心理学・精神医学の多くの研究論文が報告し続けてきたことです。

なお、この本記でいう宗教的経験とは、宗教的な意味合いを包含する幻覚的な経験のことです。その形態は、視覚的あるいは聴覚的、感情的・触覚的だったり、思考や運動が惹起されたりするなど多様です。この種の幻覚的な経験は、「神秘体験」あるいは「超越体験」などとも呼ばれています。

また、宗教的経験における精神病様の超越的現象の発生を説明できるモデルは開発されていません。*1 ただ、その幻覚については、催眠における暗示によって現れるそれとの関連が一般的に指摘されています。宗教的経験をする傾向と被暗示性の高さとに、正の相関が見られるからです。

さらに重要なのは、麻原の破壊的活動が彼の宗教的経験とより密接に関係する可能性があることです。宗教的経験は攻撃性と結びつくと、殺人の傾向を帯び得ると研究者が指摘しているのです。*2 これはつまり、宗教的経験は脳神経の電気的揺動と関係があると考えられ、その経験の際に攻撃性を司る脳神経の部位も揺動すると、経験者は殺人に至る場合があるということです。

この攻撃性を孕む宗教的経験は、声あるいは動動・命令の形をとるかもしれません。*3 ですから、アビラケツノミコトとして戦うように神から命じられたという麻原の経験も、この種の宗教的経験に含まれそうです。

麻原が語る宗教的経験を思い起こしますと確かに、攻撃性との結びつきを疑わざるを得ません。たとえば麻原は説法、あるいは武装化に関する会合の場において、自身の前生を物語ることがありましたが、そのテーマは「戦争」であることがしばしばでした。その典型的なパターンは、「戦って世界のために『なった』」というものでした。この物語は、麻原が見た「ヴィジョン」に基づきました。ヴィジョンは瞑想中や睡眠中に現れる夢のようなものであり、その内容に宗教的な意味合いを包含し、非常に鮮やかで記憶に長く残るという際立った特徴があります。その通常の夢とは一線を画する特徴があります。その際立ったヴィジョンにおいては、ほかの宗教的経験と同様に、現実的な経験として認識されていました。たとえば、信徒はあるヴィジョンを見ると、それは前生の出来事であると、"実感"してしまう状態だったのです。

このようなヴィジョンの経験について、戦争のテーマが目立ったことから、麻原の宗教的経験は攻撃性と結びつく傾向があったと考

*1 Marc Galanter, 1996, Cults and Charismatic Group Psychology. In Edward P. Shafranske Eds., Religion and the Clinical Practice of Psychology. American Psychological Association.

*2 Michael A. Persinger, 1987, Neuropsychological Bases of God Beliefs. Praeger.

また、幻覚的経験に考え方や行動の変化が伴うかは、状況により異なる。たとえばヨガの呼吸法等の"外的刺激"によっても幻覚的経験が得られるが、この場合、そのような変化は伴わない。そのような変化を伴うのは、たとえば精神的苦痛などの"内的要因"のために幻覚が生じる場合である。

えられるでしょう。その傾向が、麻原の行動に影響を及ぼしていた可能性は否定できないのではないでしょうか。

宗教的経験に関する文献を渉猟しますと、このように麻原の該当することが散見されます。私感を述べさせていただくならば、その文献から得られる知識は、私がこれまでに接したいかなる"麻原論"よりも麻原の言動を検討するにあたり有用でした。

後者では、麻原が破壊的活動に至った一因として、大学受験に失敗した経験がしばしば引き合いに出されます。つまり麻原において、そうした負の経験が累積された結果、社会に対して憎悪を募らせたということです。

しかし麻原は、自動小銃の製造に関する会合の場で、「教学の参考書は日大学への教学」がいいんだ」とか、「わしも理系が好きで物理とは縁が深いんだ」などと、実に嬉しそうに大学受験の思い出を語っていたのです。その話は、大学受験の経験がなく、参考書とは縁が薄かった私には到底ついていけない領域にまで及びました。

この様子から考えるとむしろ、大学受験は楽しい記憶として自身の向上を夢見ることができたという意味で――麻原の胸に刻み付けられていたのではないでしょうか。少なくとも、殺人事件の動機になるようなコンプレックスとしてわだかまっていたとは思えません。

そして、これが最も肝要なことですが、麻原が意思した全世界への攻撃に直結する動機が、従来の"麻原論"には見当たらないのです。"麻原論"が動機として掲げるいかなる彼の脛の傷も、その壮気の沙汰との懸隔を問われれば、たちまち説得力を失わざるを得ないでしょう。薬事法違反の罪に問われたこと、世界中の人々を「ポア」することの間に、脈絡を見出すのは困難です。

私が知る限りにおいて、直接動機として説得力を持つのは、麻原の宗教的経験――アビラケツノミコトとして戦えと神から啓示を受けた経験――以外にありません。

宗教的経験に係わるこの状況は、オウムの信徒についてもそのままあてはまります。[*2] 信徒もまた、幻覚的な宗教的経験が豊富だったからです。

信徒は教義どおりの宗教的経験をしていたために、教義の世界観を現実のこととして認識していました。現代人が三悪趣に転生することも、それを救済する能力を麻原が具有することも、麻原の説く教えは一切が現実でした。そのために信徒は、破壊的活動を命じる麻原の指示に従ったのです。人々の救済と認識して。

この理由で私は、オウム関係者が教義の宗教的世界観に対して抱

*1 もっとも、そのような宗教的経験が麻原に起きた原因は不明だが。

*2 ただし後述のように、オウムの宗教的世界観における麻原の立場と信徒のそれは異なる。

いていただき「リアリティー」の観点から、オウムによる破壊的活動を述べさせていただきたく思います。

しかし、そのような見方には抵抗を覚える方もいらっしゃるかもしれません。オウムが事件を起こした動機として指摘されるのは大抵、一般的な犯罪動機――組織の維持や組織内における保身などであるためにこのような見方にはなじみやすい状況が社会に存在するからです。また、一般的な犯罪動機は多くの方にとって、日常経験する心情に共通する部分もあるので、なじみのない宗教的経験などよりも理解しやすいだろうからです。人は自身の経験に基づいて物事を理解するものですから、そのような傾向が生じるのは無理もありません。

信徒にとって、教義は現実だった――。

それでもこれは私の個人的見解にとどまりません。事実、事件に関与した信徒・元信徒（以下、元信徒被告人と記します）に接した取調べ官のなかにも、そのような見方をする人が存在するのです。たとえばある検察官（以下、A検事と記します）は、私に心証を明かしました。信徒にとって教義は現実であり、その教義に従って事件を起こした。その点でオウムの事件は、ほかの犯罪組織のものとは違う。また、信徒にとって教義が現実となった原因は、瞑想体験ではないかとも。

A検事は、それが理解できるまでに二年間かかったと述べていました。数百時間にわたり、多くの元信徒被告人を取り調べて初めてわかったと。

A検事は、オウム真理教が起こした事件の公判を一九九六年から一九九八年にかけて担当し、検察側証人となる元信徒被告人を証人テストする立場にありました。共犯関係にある元信徒被告人らは、検察側証人として互いに、相手の公判に出廷する状況だったのです。A検事から前述の話を聞いたのも、私が証人テストを受けた場においてでした。

検察官は証人テストにかなりの時間を費やしていました。たとえば三時間半の主尋問のために、私はのべ四〇時間以上の証人テストを受けたことがあります。[*2]

検察官は私に対してあらゆる角度からの質問をしました。弁護側の反対尋問をも想定して、それに耐え得る尋問をするためです。検察官は本番の公判において、証人テストの場では確認していなかったことでも、こう質問すれば証人はこう答えるだろうとの予測さえ可能でした。それほど深く、検察官は事件を把握しようとしていたのです。事件の背景に至るまでも。

このように徹底した証人テストを経て、A検事の目の前に、信徒の真の姿があぶり出されたのでしょう。[*3]

*1 証人テストとは、証人がどのような供述をするか公判前に調べること。

*2 自動小銃密造事件の証人として、麻原の公判に出廷したときのこと。地下鉄サリン事件の証人として初めて出廷する前には、さらに長時間の証人テストを受けた。もちろん、事件の取り調べなので、信徒のすべては把握できなかっただろう。

物事の理解は、ときには困難です。その多くの側面のうちの一つにでも誤解があると、まったく理解できなくなる場合があります。特に、自らに経験がない物事の場合には。

恐らくA検事にも、それまでに接した様ざまな情報によって、信徒に関する先入観が形成されていたことでしょう。その中の誤った情報が、信徒とのやりとりを経て、一つ一つ否定されていったのだと思います。そして二年間かかって、ほぼすべての誤解が解消された結果、A検事は前述の見解に達したのではないでしょうか。

また、別の検察官からも一九九八年の早春頃、なぜオウムが事件を起こすに至ったのか、今後聞いていきたいとの話がありました。個々の事件から離れて、検察官がこのような調査を意思するのは稀ではないでしょうか。その目的は同様の事件が惹起されるのを防止するためと思われますが、オウムが事件を起こすに至った動機・経緯の特殊性を理解していたからこそ、検察官は調査の必要性を感じたのでしょう。*1

検察官による以上の見解は、オウムによる破壊的活動を検討するにあたり、無視すべきではないでしょう。検察官は、元信徒被告人に最も長時間接した一般社会の側の人なのですから。

かつて私はオウム真理教の信徒でした。そして教祖・麻原彰晃の指示によって地下鉄サリン事件および自動小銃密造事件に関与しその罪で死刑判決が確定しています。

地下鉄サリン事件においては、一三人の方々の尊い生命を奪い、五〇〇〇人以上の方々に重軽症を負わすという大罪を犯しました。被害関係者の方々の苦痛の激しさは、私の想像が及ぶべくもないものと存じ上げます。被害関係者の方々に対しては、心から申し訳なく思っており、謝罪の言葉も見つかりません。また、人として許されない残酷な行為をしたことは、慚愧に堪えません。その贖罪は、私の命を捧げてもかなわないと存じております。

私がサリンを発散した車両では、一人の方が亡くなられ、また一人の方が重篤な傷害を負われ、今も闘病生活を続けておられます。社会において誠実に生きてこられ、一家の大黒柱だった方が亡くなられたこと。ご遺族の方々が癒されようのない深い悲しみにさいなまれていらっしゃること。やはり社会において誠実に生きてこられ、親思いだった方が健康な生活を失われ、今も重い後遺症で耐え難い苦しみに遭われていること。それを見守られるご家族の方々が精神的に苦しまれ、看病などのご負担も極めて重いこと。このような重大な結果を自身の行為によって招いたという事実、そして被害関係者の方々が今も言葉に余る悲しみや苦痛に耐えていらっしゃるとい

*1 ただし、その調査は実行されなかった。その直後に、当時オウム事件を担当していた検察官がほぼ総異動したためかもしれない。A検事は異動の前、「後任に事情（信徒にとって教義が現実だったこと）は話しておくから。でも、（長期間長時間にわたって信徒を取り調べていないから）理解できないと思うよ」と述べた。

う現実が私の心から離れることはなく、ますます続けていることが真に申し訳なく思います。

そのような状況においてまた、私には心苦しく思うことがあります。それは、約束である手記の出版を果たしていないことです。地下鉄サリン事件の被害関係者の方々が原告となられた民事裁判において、代理人の方から手記を出版するようにとのお話があったのです。

元信徒の手記を含む数多のオウム関連書籍が存在する今、執筆をしないものを上梓できるはずがなく、いかなる手記を執筆すべきか迷い続けて参りましたが、贖いに向けた行為をせずに無為に日々を過ごすのは許されないと思い、決心するに至りました。

少しでも何らかの役に立つことを願い、一般社会の方々や信徒・元信徒たちから寄せられた問いを念頭に置いて執筆させていただきたく思います。

二

以上のように期せずして、私はオウム真理教に入信することになりました。入信日は一九八八年三月一五日でした。

オウムでは、入信者は社家信徒として登録されました。社家信徒は、社会生活をしながら道場に通い、麻原や大師から修行上の指導を受ける立場にありました。私も教団の指導に従い、オウムの社家信徒らしい修行生活を送るようになりました。

ここで、オウムにおける教義・修行について説明させていただく必要があるでしょう。まず、オウムの教義・修行の成り立ちについて、信徒が教義に感じた現実性に留意しながら概観したく思います。

オウムの教義・修行は、原始仏教・大乗仏教・密教・ヨガなどを源泉としていました。その教義・修行には、これら東洋の宗教・思想の原始的な教義・修行、つまり草創期の段階のそれの影響が色濃く見られたことに着目すべきでしょう。そのために、オウムが極めて"強力な"宗教になったからです。

それら東洋の宗教・思想の根本的な教義――たとえば輪廻転生やヨガなどの実践によって得られた幻覚――は、解脱・悟りのような――つまり、宗教・"思想の創始者や草創期の現実"のことを――経験に基づいています。

教義は経験可能であり、たとえばラーマ・ガーターやラーマ・ガーターを繙くと、仏弟子が教義どおりの経験をしていた様子が看取されます。

そして、その現実感が彼らの思考・行動に強い影響を及ぼしていたのではないでしょうか。釈迦牟尼に教化されて、多くの人がそれまでの生活を棄てて出家したからです。

しかし時間の経過につれて、教義が理論的に精緻になる一方、一部の実践的な要素は欠落していきました。その為に今や、教義は信者にとって、直接的な経験と解離しがちになり、現実性という影響力が減衰していると言っても過言ではないでしょう。たとえば来世の転生先を本気で心配する信者は稀ではないでしょうか。

それに対してオウムの教義・修行の体系においては、原始的な実践が復活していました。そのため信徒にとっては、主要な教義は経験可能でした。

結果として信徒は、教義を目で見、手で触れることができるような現実として認識するようになり、思考・行動が教義に沿うものになったのです。人が通常、自身の周囲に存在する"現実"に適応し

*1 解脱・悟りを得たと麻原が認めた高弟。
*2 記述が煩雑になるのを避けるために、オウムによる破壊的活動の理解に必要な部分のみ説明させていただきます。
*3 激しい行法および行動を強力に規制する戒・厳格な出家生活など。
*4 ラーマ・ガーターやラーマ・ガーターはそれぞれ、仏弟子である僧・尼僧による詩。
*5 これは必ずしも否定的な意味ばかりではない。むしろ、隠遁生活と現代の社会生活が両立するためには、ある程度必要なことと思われる。

て思考・行動するように。実際信徒は、教義の世界観に対する現実感がこの世に対するそれを凌駕すると、一般社会から離脱して出家していきました。

このような影響力を有するオウムの教義は、麻原の得た宗教的経験が根拠でした。つまり麻原は、ヨガなどの経典に記載の行法を試みて宗教的経験を得、伝統的な教えを独自に検証・解釈してオウムの教義としたのです。オウムの教義はこのように成立したので、識者にも評価された伝統を継承した教えと、麻原の不適切な解釈に起因する有害な教えとが共存することになりました。

この有害な教えとは、日常生活を阻害するそれのことです。たとえば麻原は、一般社会は人々を苦界に転生させると説きました。信徒はかかる教義に従い、一般社会に対する破壊的活動をなすに至ったのです。

次に、オウムの宗教的世界観について説明させていただきたく思います。

教義では、修行の究極の目的は「最終解脱」でした。オウムでは七段階の解脱のステージが定められており、最終解脱はその最高峰でした。

最終解脱は、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜といわれる境地でした。

ここで絶対自由とは、カルマ（業。転生する原因）から解放されどの世界に転生するのも自由という意味です。絶対幸福とは、最終解脱の状態に安住するのも自由という意味です。絶対幸福とは、金・名誉など自分以外の外的存在に依存しなくても幸福であるという意味です。絶対歓喜とは、自己が存在しているだけで歓喜状態にあるという意味です。

なぜ解脱しなければならないのか――それは、輪廻から解放されない限り苦が生じるからだ、と説かれていました。これは、今は幸福でも、善業（幸福になる原因）が尽きてしまえば悪業（苦しみが生じる原因）が優位になり、必ず苦界に転生する運命にあるということです。特に、地獄・餓鬼・動物の三つの世界は「三悪趣」と呼ばれ、信徒が最も恐れる苦界でした。

たとえば地獄は、八つ裂きにされて苦しみながら死んでも、悪業が尽きるまでは何回も生き返り、同じ苦しみが果てしなく続くような世界です。また餓鬼・動物に生まれても、幸福な世界に這い上がるのは難しく、結局は地獄に堕ちるとされていました。アリ地獄に嵌ったアリのように。

それに対して解脱は、すべての苦痛や拘束から解放された崇高な境地でした。この解脱に至るには、私たちが本来の最終解脱の状態から身を落としていった原因を除去する必要があると説かれていました。

私たちは本来、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜である最終解脱の

*1 苦界とは、苦しみの絶えない世界。仏教では人間界を指すが、この本記では人間界に限定しない。

境地に安住していました。ところが私たちは、自己が存在するだけで完全な状態にあったのにもかかわらず、外界の存在に対して欲望を抱きました。その結果、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の境地から離脱し、輪廻転生を始めたのです。それ以来、私たちは欲望を充足するために、様々な行為（思念することも含む）をするようになりました。

その行為は情報として、私たちの内部に蓄積されていきました。この蓄積された情報を「カルマ（業）」といいます。カルマのうち、苦しみが生じる原因が「悪業」です（カルマは善業も含みますが、教団では通常、悪業の意味で使われていました）。教義では、世俗的な欲望を満たすための行為は悪業になるとされています。こうして私たちは、欲望を満たし続けたために、煩悩*2・カルマを増大させ、その煩悩・カルマに応じた世界に転生して魂を肉体に宿し、業苦を重ねることになりました。たとえば、嫌悪の念や殺生は地獄に、貪りの心や盗みは餓鬼に、真理を知らないことや快楽を味わうことは動物に、それぞれ転生する因になるとされていました。この中心的な教義でした。

カルマの法則に基づいて考えると、解脱、つまり輪廻からの解放に必要なのは、転生の原因である煩悩・カルマを減少・消滅することです。煩悩・カルマを滅尽するとオウムでは、カルマの浄化といいました。最終解脱に至るとされていました。ですからオウムにおいては、カルマの（特に悪業の）浄化が至上命令でした。

ここで、麻原について説明させていただく必要があります。麻原は教義上、カルマの浄化に不可欠な存在だったからです。

輪廻の原理とカルマの法則が支配するオウムの宗教的世界において、麻原は「神」「救済者」といえる存在でした。カルマを滅尽した最終解脱者であり、苦界に転生する運命にある私たちのカルマを浄化し、私たちを幸福な世界への転生ひいては解脱に導くことのできる「神通力」を具有するとされていたからです。

その神通力のなかには、仏教において解脱者に備わるとされている「六神通」がありました。六神通とは、天眼通（遠隔透視）・天耳通（遠隔透聴）・神足通（空中浮揚）・他心通（読心）・宿命通（自他の前世・未来を見通す）・漏尽通（人の煩悩の状態を見極める）の六つの能力のことです。この宿命通・漏尽通などを駆使して麻原は人のカルマの状態も見極め、これを効果的に浄化する指導ができるとされていました。

さらに麻原は、私たちに「エネルギー」を注入して最終解脱状態の情報を与え、また私たちが蓄積してきたカルマを背負うことにより、カルマを引き受ける――ともに主張していました。このようなカルマの移転は、「エネルギー交換」あるいは「カルマの交換」と

*1 悪業になる行為をすることを「悪業を積む」といった。

*2 煩悩とは、私たちを苦界に結びつける欲望や執着。

呼ばれていました。この工ネルギー交換は、接触でも、会話・思念でも――私たちまたは麻原の一方が相手を思念した場合でも――さては麻原に対する施術でも、私たちと麻原の間に何らかの"関係"が生じれば、程度の差はあれ起こるとされていました。

私は様ざまな状況・様態で、麻原の工ネルギーを体感しました。その感覚は、麻原が強く意識される状況では必ず生起しました。たとえば、私が麻原の近傍にいるとき、あるいは麻原と（電話で）話しているとき、瞑想において麻原を観想しているときなどです。お、麻原と距離を隔てた状況において、突然生起することもありました。

またその工ネルギーは、あるときは気体、あるときは液体のような感覚を伴って、私の身体に流入してきました。熱く感じることもあれば、冷たく感じることも、温度を感じないこともありました。そして、この工ネルギーこそが私にとって、麻原が神格を有することの証明でした。それが私の身体に注がれると、私の心が"聖なる"状態になったからです。心の汚濁は浄化され、意識はどこまでも透明になり、冴えわたりました。それは、人の五感が奏で得る、至上の感覚でした。

それが麻原の、最終解脱者の心の状態だと私は思いました。その"麻原の心の状態"は、私の心の状態とは別次元のものと感知されたからです。それは人間を超越した、まさに神のものでした。

*このような経験を自分でした人々が、その経験は自然的な過程であるよりはむしろ一つの奇積であるという感じをいだくのは当然である。しばしば声が聞こえたり、光が見えたり、幻を見たり、自動的な運動現象が起こったりする。そして、個人的な意志が放棄されたあとでは、つねに、ある高い力が外から流れ込んできてそれにとり憑かれてしまったような感じがする。その上、刷新され、安心を得、潔められ、義を得たという感じが、自分の本性が根本的に新しく生まれかわったと信じさせるに足るほどふしぎな歓びを与えるのである。

これは、心理学者ウイリアム・ジェイムズの著書『宗教的経験の諸相』に記載されている宗教的経験です。この描写から、「エネルギーを感じる」という宗教的経験の普遍性がうかがえます。つまり、その種の宗教的経験の"型"が存在するということです。経験者において、"高い力が外から流れ込んできて、潔められる"という感覚が誘起されるような。

信徒の中にも、私と同様な経験をする者がいました。このような信徒は条件付けによって、麻原が意識される状況になると、その型の宗教的経験が誘起されたのでしょう。そのために信徒は、麻原を

*このような経験とは、「二度生まれ回心」（本書記の序章二頁）のこと。（柳田啓三郎訳 岩波書店）

「高い」存在――すなわち神――と認識するに至ったのではないでしょうか。

「なぜ」の男が――麻原が教団において絶対的な存在になったことに対する疑問の声を聞きます。信徒の脳内には宗教的経験によって、「麻原は神である」という認識――感情、あるいはムード[*1]といったほうが正確かもしれません――が誘起されていたのです。麻原のいかなる言動を見ようとも、それに対する理性的判断を飛び越えて、ダイレクトに[*2]。

また私は、麻原のエネルギーが注がれると、自身のカルマが浄化されるのを実感しました。その経験も、「潔められる」という感覚が誘起されるこの型の宗教的経験の性質に起因するものでしょう。さらに「カルマが浄化される」という感覚のみならず、カルマの浄化によって起こるとされる「現象」が相伴って、私の身の上に現れるようでした[*3]。

輪廻の原理とカルマの法則が支配するオウムの宗教的世界においては、「カルマの浄化」がすべてでした。しかしカルマの浄化には、当然のことながら、入信前に私たちが一般社会で培った経験・知識は役立ちません。それはむしろ、煩悩そのもの、カルマそのものとされていました。

その一方で、麻原の指導によって、あるいは彼のエネルギーによってカルマが浄化されたことを示す効験が、身の上に現れる……。この状況に直面して私は、自身がまったく非力なのに対し、麻原は底知れぬ力を持つことを思い知らざるを得ませんでした[*4]。

では、社会信徒の基本的な修行（教義の学習・教義の実践・奉仕ヨガの行法）の概略を説明致しましょう。オウムの修行の眼目はもちろん、カルマの浄化です。そしてカルマの浄化には麻原の力が不可欠でしたから、オウムの修行体系には彼の存在が至るところに編み込まれていました。

教義の学習の内容は、魂が輪廻転生する世界観・苦界への転生の因となる行為（悪業となる行為）・解脱の因となる行為（功徳となる行為）などでした。これらの教えは、道場で開催される、麻原による説法会や大師による勉強会で説かれていました。このような催しには多くの信徒が参加し、道場が満員となるのが常でした。教団が信徒に、「誘いの電話をしたからです。

そして信徒は、悪業を浄化するために生活を送るようになります。

*1 また、側頭葉において電気的な揺動が起こると、神と結びつく、あるいは一体となる感覚が生起すると考える研究者もいる。（前出 Persinger）

*2 私の経験では、麻原から誤解され酷く叱責された際にも、エネルギー交換が起き、叱責されたことに対する不服の念は喚起されなかった。麻原のエネルギーの強さ、清らかさに圧倒され、麻原に神性を感じたからだった。

*3 その経験の具体例については、以下の適切なコンテクストにおいて述べる。

*4 麻原はカルマを自ら浄化できる立場にあったため、彼が望むならば、かなり自由に行動できた。他方、信徒は三悪趣に転生する恐怖から、カルマ（悪業）となる行為を回避した。

つまり、悪業となる行為を避け（守戒）、功徳となる行為に励んだのです。

悪業となる代表的な行為は、「十戒」として禁じられていました。これは、不殺生（殺生をしてはならない）・不偷盗（盗んではならない）・不邪淫（邪淫をしてはならない）・不妄語（嘘をついてはならない）・不綺語（必要のない言葉を話してはならない）・不悪口（悪口を言ってはならない）・不両舌（人と人とを仲たがいさせる言葉を話してはならない）・不慳貪（むさぼってはならない）・不瞋恚（憎しみから怒りを発してはならない）・不邪見（真理を否定してはならない）です。十戒は、仏教から導入したものです。だがオウムの十戒は、仏教のそれとは意味が異なる部分があるかもしれません。

ここで無視できないのは、オウムでは現代人の日常的な行為の多くが悪業とされたことです。そのために、教義が深く受容された信徒は、日常生活に支障を来す場合がありました。

十戒の「殺生」は、虫を殺すことも含まれました。一匹殺しただけでも地獄に転生しかねませんでしたから、私は突然の宗教的回心以来、釣りができなくなりました。[*2] 釣りが最大のレクリエーションだったのにもかかわらずです。

当然、虫も殺せなくなりました。たとえ蚊に刺されても、さらに私は、運動不足の解消のために再開した剣道も断念せざるを得ませんでした。武道までも地獄の功ルマ（地獄に転生する因）であるとみなされていたからです。[*3] 学生にとっては決して安価とはいえない防具をそろえて間もなかったのですが、致し方ありませんでした。

また昨今、グルメがもてはやされていますが、これはオウムの戒覚では「貪り」にほかなりません。ですから美食の追求は、餓鬼のカルマとして敬遠されていました。

食の貪りは、一般的な戒覚に比べ、かなり厳しく説かれていました。次は、私が在家信徒時に聞いた麻原の説法です。

ということは、一食を例えば阿修羅、天界のカルマだと考えたならば、二食は人間界、そうすると、三食は動物……あれれれれれ、四食になったらどうだ、四食になったら。これは餓鬼だね、これは。ということは、三食を食べて、さあおいしいおやつを食べましょうと。寝る前に、ねえ、さあ、一杯、おいしいワインでも飲みましょうかと。あるいは、おいしいブランデーでも飲みましょうかと。これは、餓鬼だね。

*1 虫を五〇〇匹殺すと、人を一人殺した場合の悪業に相当するとされた。

*2 広瀬のお記 学生の皆さま（B（http://religion.web.infoseek.co.jp/ または http://tochugesha.web.infoseek.co.jp/）より。

*3 この解釈は、信徒からの質問に対する麻原の回答として、オウム出版の書籍に記載されていた。ただし、この教えは、一般的ではなかった。また、オウムは後に、武道を奨励するようになった。

ところで、貪りというのは、心のカルマだったよね。そうでしょ、貪*・瞋・癡というのは心のカルマだよね。それはいいかな。そして、よく考えてごらん。一日二十四時間のうちに、例えば朝起きて、さあ朝食、何食べようかしら」と、食べると。それから朝食が終わったら、次、昼飯何食べようかと考える。で、昼飯が終わったら、あー、おやつだ、「今度は夕食、何のディナーを食べようかしら」と、食べる。で、寝る前食べると。

このとき心は、何に集中してるか。どうだ。食い物に集中してるよね。これはどうやら睡眠時間をはずして、いつも食い物に集中しているとしたら、これは餓鬼のカルマだよね。わかるかな、言っていることは。

（一九八八年九月一八日　東京本部道場*2）

スポーツによって快楽を味わうことさえ、動物のカルマとされていました。次は、右記の説法の続きです。

はい、次。じゃあ今まで曖昧だった、動物と天界の差だ。動物も天界も同じように無智のカルマによって生じる。これは中間状態に入ったとき、その現れ方が違ってくるわけだ。どのように違うかと。いいかな、まず動物はだよ、たくさん楽しいヴィジョンが出てきます。

例えば、ボールを追っかけてるヴィジョンだとか、ちょうど猫が玉取ってるよね。あるいは、あなた方には、それはサッカーボールを蹴ってるように見えるかもしれない。よく考えてごらん。サッカーボールを蹴ってるのと、両手で、猫の両手がこう持って、こうね、玉取ってるのと同じだと思うか、違うと思うか。――現象的には同じだね、これは。

あるいはだよ、ボールが飛んできて、その飛んできたボールをバットで一生懸命ひっぱたいてると。で、その飛んできたボールをね、あるいは取ってる……。これはだよ、犬に棒切れをポッと投げて、犬がパッと走っていって、その棒切れをくわえてパッと戻ってくるのと、玉がカーンと飛んでいったと同時に走っていってキャッチするのと、同じか違うか考えてごらん。

これが、動物の無智のカルマ、ねえ、生まれ変わる条件なんだよ。

なお、十戒の「不邪見」は、真理を否定してはならないという意味でした。ですから実質的に、オウムの教義を疑うことは禁じられていたのです。悪業になるとして。

*1 貪・瞋・癡とは、貪り・怒り・無智（真理を知らないこと）。
*2 教団発行の『導師ファイナルスピーチII・説法集 上』より。
*3 中間状態とは、死から次の転生までの間の状態。

信徒において、何らかの引き金によって「条件付け」が形成されると、三悪趣に転生する恐怖のために、悪業となる行為はできなくなります。その状態になった信徒は、考え方や行動が周囲の人（非信徒）とは噛み合いません。悪業に関するオウムの教義は、常識や一般人の行動様式とは相容れないからです。その結果信徒は、一般社会における生活にストレスを感じるようになり、出家へと向かったのです。

地方、功徳となる行為は、麻原や教団に対する奉仕と説かれていました。社会信徒が可能な代表的な奉仕は、布施と布教（入信勧誘・チラシ配りなど）でした。

布施は、たとえば財産を教団に寄贈することですが、物に対する欲望や執着――苦界に転生する根本的な原因――を減少することになっていました。これは、欲望や執着とは逆の行為をすることによって、これらの心の働きを減衰するという考えです。

苦界への転生を避け、幸福な世界への転生、あるいは解脱に近づこうと、信徒が進んで布施したことは理解していただけるでしょうか。信徒も悪業を浄化しない限り、三悪趣に転生するとされたからです。前述のように自発的な行為が悪業になるのですから、信徒も入信前は悪業を蓄積してきたことになるのです。ですから信徒は悪業を必死で浄化しようとしていました。

可能な信徒は、何千万円の単位の布施をしていたようです。私は学生でしたから高額の布施は無理でしたが、教団が大学祭に参加して布教するための費用として、二五万円程度の布施をしました。そのときは、意義ある善行ができたと随喜の念を覚えました。布施は、三悪趣に転生する人々を救済するために役立てられると考えていたからです。

布教は、入信勧誘やチラシ配りという形態が代表的でした。その実践は、真理――つまり、麻原やオウム――との縁を深めるとされていました。他を真理に結びつけると、カルマの法則によって、それが自身に返報されるとの考えからです。真理との縁がないと、永遠に救済されず、業苦にさいなまれることになります。ですから真理との縁の形成は、オウムでは重視されていたのです。

入信勧誘については、教団は在家信徒に対し、家族や知人を勧誘するように指導していました。非信徒は悪業を積み続けて三悪趣に転生するので、オウムに入信させて真理の実践をさせなければならないと訴えたのです。

それに応えて、在家信徒は懸命に入信勧誘していました。家族や知人に、来世において苦しい思いをさせたくないという気持ちからです。しかし、その気持ちが通じることはほとんどなく、在家信徒が集まると、それを憂える声が聞こえました。

また在家信徒は、大学にサークルを設立して入信勧誘しました。大学祭に参加し、麻原の説法会などのイベントを開催したのです。

しかし、学生が入信に至ることは、ますありませんでした。大学祭という開放的な雰囲気に助けられ、イベントにはかなりの人数が集まったのですが。

チラシ配りについては、麻原の著書の宣伝を東京二三区の全世帯に配布しました。午後九時頃になると、有志の社家信徒が道場に集まります。有志は担当の出家者から住宅地図を渡されると、同輩の車で現地に向かいます。そして住宅地図と照合しながら、一軒一軒のポストにチラシを入れるのです。

また社家信徒は日中、街頭や大学のキャンパスでもチラシ配りをしました。

布施を含む奉仕行は教義上、さらに重要な意味がありました。麻原が意思する善行の実践によって、彼との"絆"が強まるとされていたのです。その結果、麻原の「エネルギー」を得ることができ、それによって自身のカルマが浄化されると説かれていました。

これは、ヨガにおける「バクティー(奉仕)・ヨガ」に基づく教えでした。バクティー・ヨガとは、奉仕によって至高の存在と合一する方法です。

後述致しますが、私は奉仕行によって、麻原のエネルギーが頭頂から流入するのを日常的に感じるようになりました。

また信徒は、麻原のエネルギーを得るために、「イニシエーション(秘儀伝授)」を熱心に受けていました。イニシエーションとは麻原が信徒にエネルギーを注いで最終解脱状態の情報を与え、また信徒のカルマを背負う"儀式"です。加えて、イニシエーションを受けると、麻原との縁や絆が強まり、解脱に至る因が培われるとされていました。

イニシエーションは種々ありましたが、最も代表的なものが「シャクティー・パット」でした。シャクティー・パットにおいて、麻原は信徒の額に親指を当て、一〇分間にわたってエネルギーを直接注入しました。このとき多くの信徒が宗教的経験を得、麻原に対する帰依を深めたのです。

イニシエーションを受けるためには、教団に"布施"をする必要がありました。シャクティー・パットの場合は、五万円以上の布施と定められていました(ただし、これを受けるための講習費が、さらに六万円必要でした)。そのほかのイニシエーションの最低額は、瞑想法の伝授(DNAイニシエーションを含む)が三〇万円、血のイニシエーションが一〇〇万円、PSI(パーフェクト・サルヴェ

*1 この絆は、「グル(宗教的指導者=麻原)」と「パイプ」と形容された。このパイプを通して、距離を隔てていても、麻原のエネルギーが弟子に流入するとされた。

*2 この宗教的経験が起こるメカニズムについては、第二章第五節で述べる。

*3 DNAイニシエーションでは、培養された麻原のDNAを摂取する。

*4 血のイニシエーションでは、麻原の血液を摂取する。密教の伝統的イニシエーションの代替。

*5 PSIでは、麻原の脳波を数ボルトの電圧に増幅し、これを頸部に印加する。PSIにはいくつかのランクがあり、その最高ランクのものが一〇〇〇万円。

イション・イニシエーション）が一〇〇〇万円でした。

このようにイニシエーションは高額でしたが、これを受けるために借金までする在家信徒も稀ではなかったのです――教団が信徒に対して勧めていたからでもありますが――。前述の布施も含め、文字どおり金に糸目を付けないほど信徒がオウムに傾倒した理由は、麻原がカルマを背負う力を具有していたからにほかなりません。カルマを浄化しないと苦界に転生するのですから、カルマを背負ってくれる麻原は、まさに「神」「救済者」でした。その神の力を、信徒はイニシエーションによって体感していたのです。

では、オウムで実践された修行として最後に、ヨガの行法を説明致しましょう。

ヨガの行法には、脳を刺激する作用があります。その作用のために信徒において、教義が示すとおりの幻覚的な経験が誘起され、オウムの宗教的世界を現実として認識するに至ったと考えられます。ただし、信徒のその現実感は、教学の証明をするときのような論理的思考――教義どおりの経験をしたから、オウムの宗教的世界観は正しい――の結果とは単純にいえないかもしれません。つまり、行法による宗教的経験には、論理的思考を超えて、よりダイレクトに人の感覚に訴える要因が存在するかもしれません。前述の"高い力が外から流れ込んできて、潔められる"という宗教的経験のように、その可能性については、後述致します。

オウムで実践された行法を理解していただくためには、教義における人体観の知識が必要になります。

まず、オウムの修行では、人体内で発生するとされる「エネルギー」が中心的な役割を担いました。この エネルギーには、「クンダリニー」と呼ばれるものや「気」と呼ばれるものがあり、信徒にとって、これは"実在"でした。

クンダリニーは尾底骨付近から発生し、背骨に沿って存在するとされる「管」の中を上昇するエネルギーでした。私はクンダリニーを、粘性のある熱い液体のように感じました。

気は、気功で、うものと同じと考えていただいて差しつかえありません。私の経験では、気は気体のように感じられ存在であり、体内を移動したり、ある いは全身に充満したり、身体を出入りしたり、多様な感覚をもたらしました。

このエネルギーの流れによって、私たちは心滴（意識）を運ばれ、解脱などの宗教的経験をしたり、あるいは死後にはカルマの定める世界に転生したりすると説かれていました。したがって、解脱や幸福な世界への転生を達成するためには、まずクンダリニーを覚醒させ、次にエネルギーを適当に制御する必要が出てきます。教義上、それも可能にするのが、ヨガの行法だったのです。

*クンダリニーの覚醒は、クンダリニーが活性化することであり、解脱への第一歩とされた。麻原のシャクティー・パットによって、容易に覚醒するとされた。

エネルギーの制御のための行法として代表的なのは呼吸法であり、これは激しい出入息と深呼吸・保息（息を止めること）の組み合わせといえます。また呼吸法の作用は、クンダリニーの覚醒や管の浄化・エネルギーの強化などとされていました。

管の浄化とは、これを詰まらせているカルマを浄化し、エネルギーが通るようにすることです。カルマは管に蓄積し、エネルギーの流れを阻害するとされていたのです。呼吸法は、管が詰まっているときに、エネルギーの流れをスムーズにするために行にられていました。

そのような話は現実性を欠く……と思われるかもしれません。しかし私は、その教義どおりの反応が心身に現れる状態にありました。エネルギー・管・カルマ（悪業）は、心身の好不調とも直結する無視し難いが存在だったのです。

たとえば、私が知人に対し、強い口調で苦情を言ったときのことです。その瞬間、私の胸に衝撃が走り、その部位の管が詰まってしまったのです。知人に苦情を言ったことが悪業になり、その悪業が管を詰まらせたかのように。

そして、私は胸部に異和感を覚えるようになりました。たとえていえば、血管を圧迫されたときの感覚でしょうか。同時に、それまで身体に満ちていたエネルギー（気）が失われ、私は消沈した精神状態になりました。

その後、私は呼吸法と、麻原のエネルギーを得るための瞑想によって管を浄化し、この心身の不調から脱しました。麻原の教えに従って。何から何まで教義どおりでした。

また、エネルギーの強化は、解脱や幸福などの世界への転生のために不可欠でした。エネルギーが強化されて初めて、私たちの意識は至高の宗教的世界に誘われ、解脱や幸福などの世界への転生が可能になるとされたからです。このような教義は、*極厳修行において呼吸法などを行に、私を含む多くの信徒が幻覚的に経験していました。

次に、瞑想について述べさせていただきます。以上の修行は、瞑想のための準備と位置付けられるでしょう。瞑想は、修行の果実を得る場として、オウムでは最も重きを成していました。

瞑想はまず、修行者としてふさわしい行動――つまり、麻原との縁を深める行動・カルマを浄化する行動などを習慣付ける目的で行にられました。その瞑想においては、麻原への帰依を誓う詞章を唱える・自身が執着する対象をすべて麻原に捧げるイメージをする・麻原に自身の悪業を懺悔し、カルマの消滅を願う詞章を唱える・麻原に加護・導きを願う詞章を唱えるなどの行法をしました。

*1 極厳修行では、一日二四時間が修行。解脱のために数か月以上行う場合もある。

*2 「私は十悪を犯し、グルとの契約を破ってきた。すべての悪業を告白し、二度と同じ過ちを犯しませんゆえ、どうぞカルマを消滅してください」などと唱える。

*3 「この現象界の喜びは幻です。グルの与える絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜は輪廻を超えて存在し、ただ一つの真実です。いかなる幻影が訪れても、それを打ち砕き、真実の道を歩みますゆえ、どうか加護ください」などと唱える。

また、麻原を観想することによってカルマを浄化する瞑想法もありました。この瞑想においては、麻原のエネルギーが自身の頭頂から流入し、カルマを浄化するイメージをしました。

私は実際に、そのイメージどおりの幻覚的な経験をしました。そしてやがて、瞑想中に限らず日常的に、麻原のエネルギーが頭頂から注がれるのを感じるようになったのです。

そして瞑想は、重要な宗教的経験を得る場でもありました。麻原の力によってカルマが浄化されると瞑想中、信徒の意識は肉体から離脱し、種々の宗教的世界を経験します。そのような宗教的経験を経て、すべては執着に値しないことを感得すると、解脱・悟りが訪れるのです。*

*ただし解脱・悟りについては、在家信徒時ではなく、出家後の極厳修行において、経験するケースがほとんどだった。

麻原は「アビラケツノミコト」を命じる啓示を受けて以来、オウムの拡大に全力を傾注してきました。そして一九八八年秋、その思いは目に見える形となって現れつつありました。日本に五本支部の他、ニューヨークにも一支部を既に設置。翌年八月には富士山を真近に臨む絶好の地に、富士山総本部道場を建立。信徒数も、出家信徒が約一五〇人、在家信徒が約三〇〇〇人に達しました。

当時、麻原は述懐しています。「このわずか三年間のうちにシヴァ神のご意思がオウムを全国規模の――いや全国規模どころか二ューヨークに支部を有し、今年中にもまたいくつかの海外支部ができる予定の世界規模とも言える宗教団体に発展させてくださった」[*3]と。

そのような同年一〇月二八日、麻原は出家者に対して説法をしました。[*3]

わたしは今から三年前に、これは『トワイライトゾーン』を使って、わたしはアビラケツノミコトであると、そして光の軍勢を率いて救済するんだと、そういう比喩を使っている。

当初、初めは、わたしはね、凡夫[*4]を救済するのがわたしの役割だろうと考えていた。しかし、近ごろわたしは心が少しずつ変わってきている。どのように変わってきてるかというとひょっとしたら、動物化した、あるいは餓鬼化した、あるいは地獄化した。この人間社会というものの救済は不可能なのかもしれないなと。そして、にやめどうしたらいいかというと、新しい種、つまり、今の人間よりも霊性のずっと高い種、これを残すことがわたしの役割なのかもしれないなと。これはまだ漠然としたものである。はっきりしたものではない。だから、ずれるかもしれない。

来年のオウムの動きは、目ざましいものがあるだろう。そして激しいものがあるだろう。（富士山総本部道場[*5]）

ここで、「今の人間よりも霊性の高い種、これを残す」とは、オウムの信徒のみを残し、それ以外の人類を殺害することを意味します。[*6]その目的で麻原は、一九九〇年に猛毒のボツリヌス・トキシン

*1 シヴァ神とは、オウムの主宰神であり、宇宙の破壊を司る神。麻原のグル（霊的指導者）でもある。

*2 『滅びの日』麻原彰晃著

*3 出家者向けの説法の多くは、出家者以外の者が接するのを禁じられていた。

*4 凡夫とは、仏法に帰依していない人。オウムでは、非信徒の意味。

*5 教団発行の『専修ファイナルスピーチ五・説法集[上]』

*6 シヴァ神には、許された聖者しか住むことができない。したがって、アビラケツノミコトとして地上にシヴァ神だけを実現するために、住むことが許されない者を排除するという考えかもしれない。

を世界中に散布することを企図しました。ヴァジラヤーナの救済として。ですからこの説法は、ヴァジラヤーナの救済へと踏み出す麻原の意思を示すと考えていいでしょう。

麻原がこの救済について、「来年のオウムの動き」などと差し迫った時期を掲げて示唆した例は、それ以前の説法には見当たりません。ですから、麻原のこの変化について、検討したく思います。

麻原は「アビラケツノミコト」を命じる啓示を受けたものの、その時点においても、その後の時点においても、幸いるべき光の軍勢は存在しませんでした。またその啓示は、麻原がその実現に向かうにあたっては、あまりにも漠然とし過ぎていました。つまり、光の軍勢を率いて戦うまでのプロセスに関する情報がまったく欠落していたのです。たとえば、合法的に政権を握った上で戦争を起こすのか、あるいは超法規的な手段に訴えるのか……。

これでは動こうにも動けません。シャンバラ建国の意志が刻印された麻原の脳細胞が、その実現を身体にいくら指令しても、均衡が破れたのは、シャンバラ建国のプロセスを示す"情報"が麻原にもたらされたからかもしれません。

「『ヨハネの黙示録』の封印を解いてしまいなさい――」

麻原は一九八八年秋、シヴァ神から示唆を受けたといいます。そして側近の出家者と共に『ヨハネの黙示録』の解読作業に取りかかりました。その作業の様子が『滅亡の日』に描写されています。

「ところで、この手紙の後の方は、もっと興味深いことが書いてあるよ。『勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。彼は鉄のつえをもって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう』という言葉だ」

「そうなると、オウムのこれからの動きへの示唆ではないですか!? *シッシャは全員タントラ・ヴァジラヤーナの修行者」

「そうだ、M大師。ここはそうとしか読み取れない」

オウムはヴァジラヤーナの救済によって、世界を統治する――。そのように、麻原は『ヨハネの黙示録』を解釈したのです。「彼は鉄のつえをもって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう」という記述は、麻原が武力をもって諸国民を支配することを示すと。

『ヨハネの黙示録』をこのように解釈していった結果、麻原にはシャンバラ建国、つまりヴァジラヤーナの救済への道筋が見えてきたのではないでしょうか。麻原は『滅亡の日』の続編である『滅亡から虚空へ』の中で、「『滅亡の日』と本書を合わせて読むことによって、ヨハネに『黙示録』を書かせた神の大いなる救済計画が浮かび上がってこよう」と述べています。

*シッシャとは オウムの出家者。

そして実際、一〇月二八日の説法は、『ヨハネの黙示録』を解読した結果なされたと考えられます。説法の内容――新しい種、つまり今の人間よりも霊性のずっと高い種、これを残すべく『ヨハネの黙示録』の麻原による解釈――超人類の集団の出現が、神の怒りによって人類が終局を迎える時期と一致している――に関係しているからです。

後に麻原はノストラダムスの予言書も解読し、その内容に従って教団の武装化を試みました。たとえば一九九三年、予言書の「剣」「鮭」との記述をそれぞれレーザー兵器・大陸間弾道弾と解釈し、私ども広報技術（当時の科学班の名称）にその製造を指示しました。このように預言・予言書に従って実際に行動するほど麻原はその内容に現実感を抱いていたのです。ですから、麻原は預言・予言書の解読によって、ヴァジラヤーナの救済についての現実感を深めて鼓舞され、教団の武装化を推進していったのでしょう。言い換えると麻原において、実現不可能といえるこの救済のモチベーションが、預言・予言書の解読によって強化されたのかもしれません。

なお、一〇月二八日の説法の前にも、ヴァジラヤーナの救済の始動に関連すると考えられる麻原の行動が散見されます。その約二か月前の八月に麻原は、チベット密教カギュ派総帥カルマ・リンポチェを富士山総本部道場建立記念式典に招きました。

＊1　一九九二年九月から翌年二月にかけて、私はラジオ番組・『ノストラダムス秘密の大予言』の制作に携わった（モスクワ放送から教団が発信した番組・『エウアンゲリオン・テス・バシレイアス』の一部）。私は麻原らがノストラダムスの予言を解読している状況を録音したテープを番組用に編集する作業を指示されたが、麻原が非常に怒心だったことが印象に残っている。

＊2　麻原においてはそれほどまでに予言に現実感を抱いていたのでしょう。麻原は自身も予知の経験"をしたため、予知という現象を信じたのかもしれない（麻原は自身を予言者と称していた）。その経験は、ヨガの行法によって脳内神経伝達物質のバランスが崩れ、予知したと感じるような錯覚が起きたものかもしれない。ヨガの行法をしていた私を含む信徒も、類似の感覚を経験することがあった。その種の経験と脳内神経伝達系の変調との関連を私が考える根拠は、自身が妄想・幻覚状態になったときの経験による。私がその状態になったのは、第一審中の一九九九年三月から翌年一一月（軽度の症状を含めると翌年三月）にかけてだった。その期間中、予知と感じられる出来事が私には頻発した。たとえば、幻覚によって感知したことが翌日の新聞に載るのだ。これは、妄想・幻覚状態における経験だから、脳内神経伝達系の変調に起因するだろう。当時、私の思考は支離滅裂だった。新聞に掲載された出来事が、自身の思念によって起きたと感じた。また公判において、心と動かすと、傍聴席から爆発音が聞こえて傍聴人が退廷し、「一人退廷」との声が聞こえた。私が心を動かすと、覚醒時、幻聴は休みなく聞こえ、私はその声に従って行動していた。たとえば飲食を制限する声に従って脱水症状になり、病舎に移されて三日間点滴を受けた。このような状況のため、裁判長は私に「裁判を続けますか」と質問した。私は「はい」と答えたが、私が幻聴の指示に従って答えたことは、裁判長も気づかなかっただろう。なお、私が妄想・幻覚状態になった契機は、公判の証人尋問の準備のために、弁護側証人の精神科医と面接したことだった。その精神科医と、後に私と面接した社会心理学者によって、私のその状態は、信徒の頃に経験した変成意識状態に起因するフラッシュバックであることが、突然の宗教的回心以来経験するようになった変成意識状態と、教団によるLSD等の薬物のイニシエーションによる変成意識状態の影響である。

麻原は、仏教のヴァジラヤーナの教えに独自の解釈を加え、ヴァジラヤーナの救済を説きました。[*1] カギュ派は、カギュ派の修行者列伝をしばしば引用し、ヴァジラヤーナの教えを説いています。[*2] その宗派の総帥を招いたことから、麻原がヴァジラヤーナを強く志向していたことがうかがえます。

その頃から麻原は信徒に対し、ヴァジラヤーナの教えを頻繁に説くようになりました。当時説かれたのは、信徒を解脱・悟りに導くための教えでしたが、後のヴァジラヤーナの救済の説法の基礎となる教えでした。（もちろんカギュ派の教えは、麻原が信徒を違法行為に導くために説いたヴァジラヤーナの救済の教えとは異なります。）

また麻原は私に対し、何らかの誘いかけをしたことがありました。

同年九月五日に東京大学で開催された説法会でのことです。

「一緒にやりましょう」

説法を終えた麻原は私に歩み寄り、唐突に話しかけました。その時私は、麻原の強いエネルギーに包まれ、全身がしびれたようになりました。そしてその エネルギーに圧倒され、「よろしくお願いします」と答えるのが精一杯でした。ただ同時に、〈何を一緒にやるのか。尊師は私に、何を求めているのだろう〉との問いも心に浮かびました。

その前日私は、麻原の側近中の側近といえる大師から電話連絡を受けていました。「明日、東大での尊師の説法会に出席するように」と。その大師は、麻原から指示されない限り、私に連絡などしないはずです。

麻原がそのような手間をかけたのは、その背後によほど強い思念があったからでしょう。そうしますと、ヴァジラヤーナの救済を内に秘めていたとしか思えません。

さらに、教団が初めて違法行為に手を染めるに至る出来事が起きました。その際に、麻原が「これはヴァジラヤーナに入れというシヴァ神からの示唆だな」と語るのを、側近の出家者が聞いています。[*3]

同年九月二七日富士山総本部道場において、修行中だった社家信徒の真島照之氏の死亡事故がありました。麻原らは、この事故が宗

*1 麻原は「アビラケツノミコト」の答えを受けたとき、神々に相談したという。「理想国を造るため、戦を用いてよいのか」と（前出のトワイライトゾーン）。仏教を信奉していた麻原は、その不殺生戒とアビラケツノミコトの使命の間の矛盾を解決する必要があった。その解決を、麻原は仏教のヴァジラヤーナの教えに見出したのだろう。ヴァジラヤーナには、救済できない人を呪殺し、仏国土に導引するという逸話があるからだ。また逸話では、その殺生について、慈悲心に基づく最善の救済として正当化しているからだ。かくして麻原は、救済のために行うなら、通常の仏教（顕教）が禁じる行為や違法行為も許されると考えるようになったのだろう。そしてその考えに基づき、ヴァジラヤーナの救済を説き、それを実行したのだ。

*2 第三章第二節一頁参照。

*3 第三章第一節参照。

*4 日私にとってオウムとは何だったのか。 早川紀代秀・川村邦光著 ポプラ社

教法人格取得の妨げになることを恐れ、真島氏の遺体をドラム缶の中で焼き、遺骨を道場付近の湖に遺棄したのです。*1

麻原は真島氏の事故について、救済活動を遅らせないためには違法な手段によって対処するしかないと考えたのでしょう。〝ヴァジラヤーナ的〟な思考様式に基づいて。そしてそれを契機として、麻原はヴァジラヤーナの救済を開始する決意を固めた可能性があります。「ヴァジラヤーナに入れ」というシヴァ神の示唆だと。

その後も、このように教団の拡大に支障が生じる状況になると、麻原はヴァジラヤーナの救済に向けた行動を先鋭化していきました。

ただし、麻原を動かした本質は、その〝状況〟そのものではないはずです。その〝状況〟が、麻原の行動の目的――つまり、地球上にオウムの国家を建設すること――あるいは人類をポアすること――に比してあまりに矮小であり、この目的と釣り合わないからです。本質は、アビラケツノミコトを命じる啓示の際に生起した意志です。その〝状況〟は、その意志を刺激したに過ぎないでしょう。

以上のように一九八八年の秋頃には、麻原の内面において、ヴァジラヤーナの救済の野望は押さえ難いものになっていたようです。そして、この救済へ向かう意思を示した説法の約三週間後、麻原は側近の大師に対し、後のオウムの動きに関して指示しました。その大師が作成したメモを次に示します。*2

六十三年一一月五日は黙示録の予言を麻原がセツの予言その後世界戦争。二〇〇〇年まであと一二年しかない。滅亡の日を生版しらと一五日、オウムの方向性……旧約聖書によるとオウムの時間はあと七年、石油になってハルマゲドン、ソ、米、日、世界大戦デザイン編集がプロパガンダマシンは完璧になりきること（人材と経済力のためでもある）

一、新信徒の獲得、二、人材ハンター（ブレーンハンター）（信徒の中から選ぶ）三、大学理数化学の人材をぬきとる、四、ドクター（医者）を集める、五、美人を集める（看板）六、経済的センスを持っている人間（プロパガンダ＝広報）七、法律専門家八、大師（一人で二と三億）が五〇〇人九、建築班一〇〇〇人一〇、七年後大師だけで一四五〇〇億

「大学理数化学の人材をぬきとる」との指示からは明らかに、麻原が理系の人材の獲得を重視していたことがうかがえます。それは科学技術を用いた大量殺人である「ヴァジラヤーナの救済」を意図していたからでしょう。それ以外の解釈はできません。（なお、このメモからは、『ヨハネの黙示録』の解読の結果、麻原がかかる指示を出すに至ったことがうかがえます。）

*1　教団が遺体を処理したほうが、真島氏の転生がよくなるとの考えもあった。

*2　この指示の内容は、一般信徒には明らかにされていなかった。

かくして、オウムは動き出しました。麻原は在家信徒に対して、「現代人は悪業をしているために来世は三悪趣に転生する。世紀末に核戦争が起こる」などと、以前にも増して人類の危機を訴えました。そして、その救済のためとして、信徒に布教活動をさせたり、また出家の必要性を訴え、多くの在家信徒を出家させたりしたのです。

オウムの信徒制度では、在家信徒のほかに出家信徒が定められていました。オウムの出家とは、世俗的な関係を一切絶ち、麻原に全生涯を捧げ、すべての魂の救済と自己の解脱に専念することでした。ここで救済とは、その対象について、まず三悪趣への転生を防ぎ、最終的には解脱させることでした。最終的な救済は、今生の一生のみでは到底達成不可能なので、麻原と共に転生を繰り返し、何万生かそれ以上の生をかけての達成を目指すべきものでした。

出家者は一般社会から離れ、教団施設内で共同生活をすることになります。学校・会社をやめ、家族とも絶縁の形になります。つまり、解脱するまでは、家族や知人に会うことも、連絡することも禁止でした。家族と同じ墓に葬られることもありません。死後のことは、麻原・教団にすべてを委ねることになっていたからです。*1

また出家者は、財産の所有もできません。財産は、出家時に一円も残さず、教団に布施します。出家後は、毎月一五〇〇〇円の「業財」が支給されますが、これは最低限の生活必需品の購入のために使う程度で、ほとんどの額を教団に再び布施することになります。*2 普通私物として所有できるのは、許可されたものだけです。それは衣装ケース（大きさ約20×35×60cm）二箱分の、麻原の著書・筆記具・説法テープを聞くためのヘッドホンステレオ・衣類でした。

飲食できるのも給与される「オウム食」のみであり、通常一教団外で活動するとき以外は――外食は禁止でした。オウム食は愛憎がありましたが、私が出家した直後のものは一日一食で、ご飯どんぶり一杯・根菜水煮どんぶり一杯（各自が塩で味付け）・納豆一パック・のり半枚・ひじき大さじ一杯・豆乳お豆二杯でした。

書籍・新聞・テレビ・ラジオなどの教団外の情報に接することも奉仕行で必要な場合以外は、一切禁止でした。*3

これらの戒めは、三悪趣に転生する原因になり、また解脱の妨げになる煩悩を消滅するためのものでした。つまり出家レベルになると、家族に対する愛情さえも煩悩とされ、滅尽すべき対象になるのです。

そして出家者は、睡眠や食事などの時間を除き、奉仕行と修行に

*1 転生を良くするために、遺体は教団内で荼毘に付し、遺骨は教団内に納骨された。

*2 業財とは、これを布施した在家信徒の業（カルマ）が込められているという意味。業財を使うとその力ルマが自身に移るとされたので、出家者は使うのを極力避け、控えた。一九九三年一月からは、教団から課された修行プログラムの進度に応じて、七〇〇〇円から一五〇〇〇円の範囲で支給されるようになった。

*3 教団は各出家者に対し、つねと呼ばれる奉仕行を課した。その目的はすべての魂の救済とされていた。この奉仕行は、本支部の運営・書籍の出版（編集から印刷・製本まで）・教団施設の建設など、教団の活動のほとんどの領域を支えた。

勤しむことになります。休日も自由な時間もありません。

また私の出家直後の頃は、睡眠時間も修行スケジュールに応じて定められていました。スケージが高くなるに従い、睡眠時間は五時間から三時間に減少しました。そしてそれが守れなかった場合、食事を一回抜くという罰則も定められていました。*1

私が所属した部署では、私の出家直後の頃は集団行動をしており、睡眠時間は四時間と決まっていました。また一日一食を徹底するために、午前八時に集団で食事し、それ以外の時間には食事はできませんでした。

入信時、私は出家をまったく考えていませんでした。長男という立場上、親の老後を見たいと思っていたからです。また、私が出家すると家庭が崩壊しかねないとも思っていたからです。そもそも、入信前に読んだ麻原の著書によると、社会でも解脱可能だったので、そのような無理をしてまで出家する必要を感じませんでした。加えて教団も、出家を制限していたのです。*2

事実、一九八八年一〇月の私について、「就職の内定を喜び、安心している様子だった」と母は法廷証言しています。その時点で私は出家の意思は皆無でした。

ところが、私は出家することになりました。私の入信後、麻原が教団の拡大のために、出家者の増員を図ったのです。私の入信前の一年半の間に約六〇人が出家したのに対し、入信後の一年間には約二〇〇人が出家しました。

特に、麻原の命を受けて教団が人材の獲得に乗り出した一九八八年一一月後半以降は、各支部において出家勧誘の嵐が吹き荒れました。その結果、年度末である翌年の三月末までに、約一〇〇人の社会信徒が出家しました。

この状況について、理解に苦しまれるかもしれません。なぜ麻原教団が意思決定の途端、信徒はいとも簡単に、前述のような非人間的ともいえる出家をしたのかと。オウムに関する論評を読むと、この問題の扱い方に著者の戸惑いを感じます。

ここで私は、「いとも簡単に」と述べましたが、この言い方には語弊があるかもしれません。信徒が出家に向かったことには、相応の背景があったからです。

麻原が信徒に対して訴えたようにオウムにおいては、現代人の日常的な行為は悪業になるとされていました。*3 そして、一般社会は悪業となる行為を促し、私たちを三悪趣に転生させるとして警戒され、

*1 ただしその後、修行時間睡眠は強く勧められたが、睡眠不足のために事故が多発したなどの理由で、睡眠時間に関する戒律（規則と罰則）は事実上消滅した。

*2 当時教団は、必要とする社会信徒に対しては出家の勧誘をしたが、出家を許す条件として二〇の万円以上の布施を課すなど、出家に高いハードルを設けていた。

*3 第二章第二節六1八頁参照。

*4 社会心理学的な研究によると、このような教義によって信徒は、教義に基づいて意思決定する傾向が強まる。（西田公昭 一九九五年 ビリーフの形成と変化の機制について）

ていました。

この教義が受容されると、信徒は一般社会での生活において、葛藤にさいなまれることになります。悪業を積むのを回避するために周囲の非信徒の人たちと協調しにくい状況が生じてくるからです。たとえば信徒は、友人から「何かうまいものでも食べに行こう」と誘われると、対応に苦慮せざるを得ません。グルメは、餓鬼に転生する原因になるからです。

そして信徒において、このように教義によって行動にブレーキのかかる状況が生活のあらゆる場面に及ぶようになると、入信前に培われた一般社会との絆は失われます。

また宗教的経験が起こる状態では、世俗的なことに対する関心が薄れるという報告があります。[*1] この要因によっても、宗教的経験をしていた信徒は、日常生活からの離脱が促進されたのではないでしょうか。

私の場合も、一般社会に関する緊迫した話を教団で聞いているうちに、その話のとおりの宗教的経験が身の上に現れました。たとえば私の仏刹で、友人が次の証言をしました。一九八八年の晩秋か初冬に私が話した内容です。

街中を歩くとヴァイブレーションを感じる、電車内のいかがわしい広告を見ると頭が痛くなる、繁華街の近くにいると体調がおかしくなるという話がありました。

当時私は、会話をするなどして非信徒の方と接したり、街中を歩いたりすると、カルマ（悪業）が自身に移ってくるのを感じました。[*2] これは、気体のようなものが振動（ヴァイブレーション）を伴いながら身体に入ってくるような感覚でした。まるで、不快な感覚も誘起されました。自身の生命活動を維持している源が、蝕まれるような、表現し難い気味悪い暗い世界にいるヴイジョンや、[*3] 奇妙な生物になったヴイジョン――カンガルーのような頭部で、鼻の先に目がある――などを見ました。

このヴイジョンは、カルマが移り、自身が三悪趣に転生する状態になったことを示すとされていました。（ですから私は、この経験によって、人々が三悪趣に転生することを実感していました）さらに、その感覚（エネルギー交換）の後に私は、心身の状態も変化しました。エネルギーの通る管が詰まり、身体に異和感を覚えたのです。[*4]

＊1 Raymond Prince and Charles Savage, 1966, Mystical States and the Concept of Regression. Psychedelic Review, 8.

＊2 エネルギー交換（第二章第二節三〜四頁参照）は、信徒と麻原の間だけではなく、非信徒と信徒の間でも起こるとされた。一般にエネルギー交換は、修行ステージに差がある両者の間で起こるとされた。また、物にもその所有者のカルマが込められているとされ、触れるとそのカルマが自身に移るとされた。

＊3 序章三頁参照。

＊4 第二章第二節一一頁参照。

す。あたかもカルマが首を詰まらせたかのように。同時に私は、エネルギーの流れが阻害されてそれが身体に充満しなくなり、滞沈した精神状態になりました。

この理由で私は、麻原がエネルギーを込めた石を握りながら、カルマを浄化する修行をせざるを得ませんでした。自身が三悪趣に転生するのを防ぐために。そして心身の不調から脱するために。

また私は、広告を始めとして情報によって、接すると頭痛などの心身の変調が起きたのです。一般社会の情報は煩悩を増大させて、人々を三悪趣に転生させるという教えの影響でした。

その一方で、私は修行をしていないときでも、麻原の心地よいエネルギーが頭頂から注がれて心が澄みわたり、自身のカルマが浄化されるのを感じることがありました。

このような状態は、奉仕行によってもたらされました。*2

これが当時の日常でしたから私は、一般社会の影響によって人々がカルマを増大して三悪趣に転生するのに対して、麻原だけが人々のカルマを浄化できることを肌で感じていました。*3 そのため私にとっては、麻原の説くとおりに、一般社会で通用している価値観は三悪趣に至らせるものとしか映らなくなり、思考・行動様式は、意味を失いました。その結果、意味を見出せるのは、解脱・悟り、意味を失いました。

*1 カルマを浄化するための修行については、第二章第二節一一一一二頁参照。エネルギーの状態は、信徒の精神状態に直接影響した。つまり信徒は、エネルギーが身体内を上昇し、身体に充満している（感覚がある）ときに、気分が高揚した。

逆に、エネルギーが下降したり、管が詰まって身体に充満していないときは、その流れが阻害されたりしたがって信徒は、精神状態を安定させるために、修行によって、エネルギーの状態を適切に維持する必要があった。このように信徒にとって、精神の安定が麻原へのエネルギーによるカルマの浄化によってもたらされ、精神の不安定が一般社会のコンテクストにおいてもたらされた。後者の精神的不安定は本文で述べたように、意思に関係なく反射的に誘発された。麻原に対する帰依や教団への従属が強まり、一般社会からの離脱が促進される背景として作用した。

*2 第二章第二節九頁参照。暗示と条件付けに起因すると思われる。信徒は自身の幻覚的経験や日常の出来事を、教義の文脈で意味付けした。たとえば前述（序章三頁）のように、「ヴィジョン」を前世における経験、あるいは未世の転生を示す経験として捉えた。また身の上に起きた出来事を、自身が過去に行った行為（カルマ）が返ってきたものとして捉え、「カルマの法則」を実感していた。一例として私は、自身の身体が固く、修行にはあぐらの運華座（両足首を股の上に載せる座法）が組めないことを、過去世以来の殺生のカルマが修行を妨げていると感じていた。このような状況は、ある宗派の信者やカルトの会員にも見られ、心理学的な説明がいくつか試みられている（第二章第五節）。その一つとして、右記のような意味付けが側頭葉の過剰活動のために起こるとの指摘がある（前出Persinger）。この機制が、信徒のその思考傾向の一因ということもあり得る。ヨガの行法は、側頭葉の活動を活性化する作用があるからだ。また、信徒がヴィジョンと含む幻覚的な宗教的経験を現実として知覚するのも、ヨガの行法によるそれ理的作用と関連があるかもしれない。ヨガの行法はホルモンの分泌を促すが、ホルモンの増加は側頭葉の組織に直接影響して記憶の保持に寄与することが示されているからだ。この状態では、幻覚が現実の記憶として保持される場合があり、記憶が保持された後に、「ヴィジョン」と現実として錯覚したとしか考えられない出来事があった。私は一日程度前のある出来事について、実際には起きそうにないことが起こったと記憶していた。同様にそれを話したとき、そのような出来事は起こらなかったと言われた。

りを目指すことのみになったのです。

このように、私は宗教的経験によって、日常生活との間に摩擦を起こす教義を現実として感じるようになり、一般社会から離れてきました。この状況について、検察官の「広瀬から出家の原因、理由を聞いたことがあるか」との確認に対して、私の指導教授は「結局、神秘体験だと言っていた」と法廷証言しています。

また私は出家することが救うことになるとも思うようになりました。三悪趣に転生する可能性の高い親を救うことになるとされていたからです。出家にあたり一番の障害は親子の情だったので、それを除くために、オウムではそのように説かれていたのです。家族など周囲の人たちが三悪趣に転生することを信徒は心から楽じていたので、この教えは効果てきめんでした。

こうして、教団が出家を許えるようになると、私は出家願望を抱くようになりました。世紀末の人類の破滅というタイム・リミットをにらみながら、家族の説得に必要な期間や就職が決まっていました。

二、三年後の出家になると思っていました。

しかし教団は、私のそれまで積み上げてきたものがまったく通用しない世界でした。私は当時大学院生であり、専門学校の講師などをすると先生と呼ばれましたが、教団では、高校を卒業して間もない年下の大師に頭で使われる場面もありました。学歴の価値は認められていなかったのです。[*2]

さらに私には、修行を進める上で致命的な欠陥がありました。身体が固く、修行に必須の蓮華座がまったく組めなかったのです。また、その解決の見通しも立たない状況でした。

このように私にとって、出家は極めて険しい道でした。それにもかかわらず私の心が出家に向かったのは、オウムの宗教的世界観が現実として感じられたからに他なりません。輪廻の原理やカルマの法則は、これに従わなくてはならない"物理法則"だったのです。すると必然的に、三悪趣への転生に結びつく一般社会を避け、解脱・悟りに誘われる出家を志向することになります。

そのような一九八八年の年末、私は麻原から呼び出されました。麻原は「救済が間に合わない、もう自分の都合を言っている場合ではない」と、出家を強く迫ります。「学院修了後に出家する約束をしました」ですから、そして、私は麻原に従い、翌年三月三一日に出家しました。

*1 出家を考えた契機は突然、頭の中で何かがはじけたような感覚がして、「出家しようと」という考えが浮かんだことだった。私はその意思を直ちに、近くにいた信徒に伝えた。大学での奉仕行を終え、帰宅のためにキャンパスを歩いているときだった。私は信徒時、このような一種の"悟り"的な着想を経験することがあった。

*2 当時の出家者は、「オウムでは学歴は関係ない」と言っていた。ただ一九九四年になると、高学歴の者が高い修行ステージを与えられる傾向が現れた。

一九八九年四月七日午前零時過ぎ。富士山総本部道場第一サティアン三階における、麻原による出家者向け説法会――

麻原「ここらへんで、広瀬いこうか」

麻原からの予期せぬ指名に、私はとまどいました。「数百人の高人を殺して財宝を奪おうとしている悪党がいた。釈迦牟尼の前生はどう対処したか」――この難問への回答を求められたのです。

なぜ難問か。それは、私ども信徒が説かれてきたのは、徹底した「非暴力」の教えだったからです。私が在家信徒だった頃は、武道さえ暴力とみなされ、悪業になると解釈されていました。暴力は信徒が最も恐れる地獄に転生する因になります。だからこそ私は回心後、剣道を断念せざるを得なくなったのです。殺意を抱いて襲いかかられんとする悪党に、非暴力でどう立ち向かえというのか。

悪党に殺されるのも己のカルマのゆえであり、カルマを清算するためには、その運命に身を委ねたほうがいい。それを正解とするのが、むしろ、私の知るオウムの教義でした。しかし麻原の雰囲気は、異質の回答を求めている……。

〈なぜ私が……〉

私は当時、出家してわずか一週間。私の直前までは、古参の大師が指名されていたのです。名前を聞き間違えたのかもしれない。あるいは、同姓の先達が指名されたのかもしれない。しばらく迷いましたが、誰も回答しなかったので、ためらいつつも私は口を開きました。

「何とかだまして捕えようとすると思います」

その後、同じような問答を数人と繰り返してから、麻原は説き始めました。

例[*2]えば、ここに悪業をなしている人がいたとしよう。そうすると、この人は生き続けることによって、どうだ善業をなすと思うか、悪業をなすと思うか。そして、この人がもし悪業をなし続けるとしたら、この人の転生はいい転生をすると思うか悪い転生をすると思うか。だとしたらここで、彼の生命をトランスフォームさせてあげること。それによって彼はいったん苦しみの世界に生まれ変わるかもしれないけど、その苦しみの世界が彼にとってはプラスになるかマイナスになるか。プラスになるよね、当然。これがタ[*3]ントラの教えなんだよ。

つまり釈迦牟尼の前生は、悪党を殺していたのです。その行為について麻原は、悪党がより厳しい苦界により長い期間にわたって転生するのを防ぐためだったと解釈しました。悪党は、悪業を犯し続けるのを放置されれば、地獄転生は必定です。地獄に転生する塗炭

*1 サティアンとは教団の施設の名称。サンスクリット語で「真理」の意味。
*2 教団発行の説法集『ヴァジラヤーナコース教学システム教本』より。
*3 タントラとは、本説法ではタントラ・ヴァジラヤーナの略であり、本文記のいうヴァジラヤーナ。

の苦しみは、殺される苦痛の比ではない。これがオウムの教義である。
り、信徒の感覚でした。常識とは相反するこの見地に立脚すると、
教団においては、殺人も救済になり得たのです。
この回答は、虫を殺すことさえ固く禁じる教えを説かれ続けていた私には、意外のものでした。しかし従前の説法とは一転、ここで麻原は仏典を引用して、「殺人」を肯定したのです。そして、この救済としての殺人は、「ポア」と呼ばれるようになりました。
ただし、そのとき麻原は、直ちにポアの実践を説いたわけではありませんでした。説法の最後は、「まあ、今日君たちに話したかったことは、心が弱いほど成就は遅いよということだ」などと結んでいます。この説法に接して私も、強い心で救済に臨まなければならないと思いこそすれ、ポアを実行に移すことは想像さえできませんでした。
ただ、麻原が説法を終え、席を立ちながら言った言葉は、いつまでも私の心にまとわりつきました。「釈迦牟尼でさえ救済できないのに、だまして捕えるなどというのは傲慢だ」と、吐き棄てるように、私の回答を批判したからです。

その後、翌年四月までの約一年間、麻原は同じテーマを断続的に説くことになります。仏典を引用したこの説法が、麻原による一連の「ヴァジラヤーナの救済」の説法の始まりでした。そしてそれゆえに、この説法には、秘められた麻原の本心が滲み出たのではないでしょうか。

前述の弟子との問答において麻原は、出家して間もない三人を指名しました。このように新参者が指名されるのは、稀です。事実、そのとき指名されたほかの五人は、すべて古参の大師でした。ですから当然、麻原には考えがあって、この三人に回答を求めたはずです。

この三人は、すべて理系であり、CSI（Cosmic Science Institute）*1 教団の科学班のメンバーでした。私の次に指名された者は、東京大学理学部基礎科学科卒。その次は、防衛大学応用物理学科卒。端的に言うと、麻原は、この三人に、ヴァジラヤーナの救済を実践させようと意図していた――すなわち、理系の出家者に教団の武装化を指示しようとしていた――のです。*2

ここに、麻原において教団を武装化し、数々の事件を起こした動機が、「ヴァジラヤーナの救済」であることは明らかです。後に教団の武装化や社会に対する破壊的活動に携わらせたCSIのメンバーを意識して、ヴァジラヤーナの救済を説いているのですから。この説法以外の諸状況も考慮すると、麻原のその動機について、それ以外に解釈の余地はありません。

*1 成就とは、解脱・悟りを得ること。
*2 私以外の二人についても、後に教団の武装化に関与した、ただし、武装化の目的を明らかにされないまま指示を受けたと思われる。

以上のように一九八九年四月七日の説法は、ヴァジラヤーナの救済に向けての一つの転換点といえます。そうした説法を麻原が始めた当時の背景として、前年一一月一五日以来獲得に乗り出した人員が出家してきたことがあります。麻原において、ヴァジラヤーナの救済を意識して準備を開始した前年一一月頃にその教えを説かなかったのは、同救済のための出家者の拡充が達成されるのを待っていたからでしょう。

また当時の状況として無視できないのは、宗教法人の認証の遅れについて、麻原が強い不満を抱いていたことです。この事態によって救済活動に困難を感じたために、麻原はヴァジラヤーナの救済への歩を進めた可能性があります。ヴァジラヤーナは救済し難い者に対する救済方法だからです。*3

教団は東京都に対して、宗教法人の認証を申請していました。宗教法人格を取得すれば、免税などの法的な優遇措置が受けられるからです。

ところが、オウムは宗教法人格の条件を満たしていたのにもかかわらず、その認証が遅延していたのです。教団では息子の出家に反対する親が代議士に依頼し、東京都に対して圧力をかけていると、いわれていました。この件についての怒りが、麻原が行動を先鋭化した原動力になったかもしれません。

実際、麻原は激怒していました。同年四月二四日に一〇〇人を超える出家者を伴い、都庁・文化庁に対して示威行動を起こしたほどです。

私どもが取り囲む中で、麻原は元検事の出家者に都庁の担当課長の尋問を指示し、この課長を吊るし上げにしました。気の毒な課長は、元検事の技に嵌められて失言を録音され、困惑の表情を浮かべていました。その後私どもは、静粛な都庁庁舎内で*2ヴァジラ・ベルの音を響かせながら、宗教法人の認証を求めて大声でシュプレヒコールを繰り返しました。

「未法（まっぽう）の世の救済を考えるならば、少なくとも一部の人間はどうだ！ヴァジラヤーナの道を歩かなければ、真理の流布はできないと思わないか！」

麻原は都庁・文化庁から富士山総本部道場に戻ると直ちに、出家者に対する説法を行い、西庁の対応を批判して檄を飛ばしました。その檄に対して出家者一同は「はい！」と応じ、麻原の説くヴァジラヤーナの救済に疑問の声を上げる者は皆無でした。*4

麻原はこのように、ヴァジラヤーナの救済の説法の内容をエスカレートしていったのです。

*1 この考え方は麻原固有のものではなく、ヴァジラヤーナの経典にも見られる。

*2 ヴァジラ・ベルとは修行で使う法具。ハンドベルのようなもの。

*3 未法とは仏法が廃れ、衆生の救済が困難な時期。

*4 日ヴァジラヤーナ教学システム教本Ⅱに収録の一九八九年四月二五日の説法より。

その後、麻原が説いたヴァジラヤーナの救済の教義は次のとおりです。

オウムの教義の見地からは、現代人は悪業を積んでいるために、三悪趣に転生するのは必至でした。さらに、悪業を積み過ぎている人々にオウムの教義（真理（精神）を高める教え＝オウムの教義）を受容できる因も尽きており、通常の布教方法では救済されないとされていました。

そのため麻原は、現代人を「ポア」して救済する必要があると説いたのです。ポアとは、麻原が救済の対象について、その生命を絶つことによって、カルマを背負い、より幸福な世界に転生させる手段でした。また麻原は、武力を用いて地球上にオウムの国家を建設し、人々にオウムの教義を実践させるとも説きました。[*2]

かくも非常識かつ非現実的な教えを信徒が受け入れ、さらに実行に移したことについて、理解に苦しまれるかもしれません。ところがその教えは、信徒の日常的な経験と密接に結びついていたのです。

まず、ヴァジラヤーナの救済の前提は、現代人が悪業を増大して三悪趣に転生することです。これは信徒にとって明らかな「事実」でした。信徒のその認識は、非信徒の方との「エネルギー交換」の経験に基づいていました。私は前述のように、非信徒の方のカルマが移ってくるのを感じた後に、自身が三悪趣に転生する状態になったことを示すヴィジョンを見ました。その為に私は、現代人は悪業にまみれ、三悪趣への転生は避けられないと思っていたのです。[*3]

現代人の転生については出家後、私はより強い危機感を抱くようになりました。教団から外出すると私は、カルマが以前に経験したことのないほど激しく、空間から自身に移ってくるのを感じました。[*4]

このような経験をしていた私は、常套手段による現代人の救済は不可能との麻原の説法を否定できなかったのです。

また「ポア」も、信徒にとっては、リアリティーのある教えでした。ヴァジラヤーナの教義は始め、麻原が"神秘的な力"によって信徒を解脱・悟りに導く方法として説かれていました。この方法では、麻原は信徒について、「苦しみ」を与えることによってカルマを背負い、解脱・悟りに導きました。

つまり、麻原が信徒に「苦しみ」を与えることによって、両者の間に"関係"が生じ、「エネルギー交換」が起こるわけです。そのとき、麻原の持つ最終解脱状態の情報が信徒に移り、また同時に信徒のカルマが麻原に移ります。[*1]

その結果、信徒はカルマが浄化され、解脱・悟りに導かれるのです。これが、そもそものヴァジラヤ

*1 「カルマを背負う」ということについては、第二章第二節三（四頁参照）。

*2 ただし麻原は一般出家者（側近でも武装化闘争者でもない出家者）に対しては、ポアを実行に移すことや武力を用いてオウムの国家を実現しようとしていることをあからさまには説かなかった。（それでも、当時の説法に接していた者は、麻原から建設的な方法を指示されると、ことごとく従った）

*3 第二章第四節八～九頁参照。

*4 転生を更くする影響を受けるという理由で、出家者は外部との接触を厳しく制限されていた。このように教団が外部の悪影響を警戒していたことが明示になり、教団から言われていたとおりの体験が現れたと考えられる。

ーナでした。また麻原がこの〝神秘的な力〟によって、信徒の精神を高める（煩悩・カルマを減じる）ことが、そもそもボアでした。

そしてヴァジラヤーナの救済におけるボアとは、麻原が救済の対象について、その生命を絶つことによってカルマを背負い、より幸福な世界に転生させる方法でした。すなわち信徒が日頃なじんでいたヴァジラヤーナの指導法も、ヴァジラヤーナの救済におけるボアも、考え方そのものは変わらなかったのです。

異なるのは後者の場合、エネルギー交換を起こすための〝働きかけ〟が何であるべきかは、最終解脱者である麻原が、対象のカルマを見極めて決定することでした。現代人の場合、あまりにも悪業を蓄積しているために、その〝働きかけ〟が生命を絶つこととされたのです。

また、ヴァジラヤーナの指導法において麻原が信徒に「苦しみ」を与えたのは、カルマを清算させる意味もありました。教義では、自身のカルマに応じた苦しみが身の上に起こると、そのカルマが消滅するとされていたからです。

実際に麻原は、竹刀で信徒を叩くことがありました。竹刀が折れるほど強く。また、〝働きかけ〟として、信徒の苦しめることもありました。様ざまな〝働きかけ〟をよく聞いたのは、信徒が強いストレスにさらされる状況を形成する課業を故意に指示し、信徒の苦痛とすることです。このような方法で対象のカルマを浄化することを「カルマ落とし」といいました。

ヴァジラヤーナの救済において対象の生命を絶つのは、この「カルマ落とし」の意味もあったのです。

以上のようなヴァジラヤーナの指導法、つまり麻原との「エネルギー交換」や麻原による「カルマ落とし」によってカルマが浄化され、修行が進んだ、さらに解脱・悟りに誘われたりした（と感じた）信徒が多数存在しました。ですから信徒にとってはヴァジラヤーナの指導法はいわばヴァジラヤーナの救済は、幻覚的ではありました。その効力が五感によって知覚され、身体に刻み込まれた実際的な教えだったのです。

私も、麻原のエネルギーによってカルマが浄化され、解脱・悟りに導かれたと感じる経験をしました。たとえば一九八九年の極厳修行において、麻原とシヴァ神を二四時間にわたって礼拝――立位の姿勢から五体を床に投げ出しての礼拝を繰り返す――したときのこ

*1 麻原は、死せる信徒をボアによって幸福な世界に転生させるとも説いた。

*2 麻原の指示によって信徒が行為をする場合も、ボアは成立するとされた。

*3 カルマを見極める麻原の能力については、第二章第二節三頁参照。

*4 信徒が教義に関して感じた現実性については、集団としての教団の影響の所産である社会的現実性も重要である。社会的現実性とは、当該の所信の内容が他者の経験や他者によって合意されているという間接的経験を通して客観的現実としてあたかも存在しているような感覚の程度である（西田公昭、一九八八、所信の形成と変化の機制についての研究(1)実験社会心理学研究二八、六五―七一）。また信徒がヴァジラヤーナの救済の教義を受容したことについては、一般社会とは異なる規範が教団において形成されていた状況も関係する。このような集団の問題については、第三章第三節。

*5 極厳修行については、第二章第二節一一頁*1参照。

とです。麻原の熱いエネルギーが頭頂から注がれるのを私は感じ、食事も摂らず不眠不休だったのにもかかわらず、まったく疲れずに集中して修行できました。

このように麻原のエネルギーが自身に流入する体験を経て最終的に、私は赤・白・青の三色の光をそれぞれ見て、ヨガの第一段階、自身の解脱・悟りを麻原から認められました。特に青い光はみごとで、宇宙空間に投げ出され、周囲一面に広がる星を見ているようでした。私たちは、これらの光に対する執着が生じたために、輪廻を始めたとされていました。その輪廻の原因を見極めることは、輪廻からの離脱（＝解脱）を意味しているのです。

解脱・悟りを認められた私は、身体が固くて以前はまったく組めなかった蓮華座が可能になりました。これは教義によると、カルマが浄化されて結果として起こる現象です。また私は、砂でも噛むように思えた食事に対する執着が消えたように思えると、毎日に戻ると、食事に課せられる修行から出て、精神的に楽になっていることにも気づきました。

以上の変化は、麻原の「エネルギー」を受けた結果もたらされたものでした。

このように私は、麻原が人のカルマを浄化して解脱・悟りに導く力を持つことを体感しました。

また、私が経験した「カルマ落とし」の一例は、一九九〇年の極厳修行で「カルマ落とし」を目的としたオウムの極厳修行は、総じて解脱・悟りを目的とし、修行者に苦痛を与えるものだったのです。

厳修行では、修行者は肉体的にかなり衰弱します。

私は居眠りを防ぐために主任で修行しましたが、それでも眠ってしまい、緑り返し床に倒れ込みました。また半覚醒ともいえる状態にもなりました。修行監督から「変なことをしている」と言われて意識が戻るのですが、自分が何をしていたのか記憶にないのです。その間、私は目を開けており、眠っていたわけではありません。

このような状態に私はあり、始めは苦痛を感じましたが、やがて天にも昇るような解放感を味わうようになりました。あたかも煩悩やカルマが浄化されたように、また、意識が肉体から離れ、上方のオレンジ色の光に向かう体験なども現れました。そして私は、麻原

*1 自身の経験を教義の世界の現出として認識することについては、第二章第四節九頁*3を参照。

*2 丹とは、それは粉に珠玉を加えて練り、焼いた食物。麻原のエネルギーが込められているとされ（イニシエーション（第二章第二節九頁参照））だった。

*3 ソーマとは、ヨーグルト。丹と同じくイニシエーション。

*4 その三時間は、名目としては瞑想の時間だった。極厳修行は一日二四時間が修行だったので、原則として睡眠時間はなかったのだ。瞑想の時間は、実際には睡眠の時間にならざるを得なかったが、座法の姿勢が崩れると、監督に起こされた。

©

から「カルマもだいぶ落ちたようだ」と言われ、第二段階目の解脱・悟りを認められたのです。

以上のように信徒の日常に溶け込んでいた「エネルギー交換」と「カルマ落とし」の教義を基礎として麻原はヴァジラヤーナの救済の説法を展開しました。

ここに、このままいくと地獄に落ちる人がいたとしたら、そしてそのカルマを見極めた者が、そこで少し痛めつけてあげて、そしてポワさせることによって人間界へ生まれ変わるとしようと。その人は、それを知って痛めつけ、そしてポワさせたと。つまり殺したわけだ。人間界へ生まれ変わったと。これは善業だと思うか、悪業だと思うか。

我の理論を知らない者は、それをそれとして見つめることができない。だから。観念的な善にとらわれてしまう。そうすると、そこで心は止まってしまうんだ。いいか。

（一九八九年四月二八日　富士山総本部道場）

ここで、地獄に落ちる人を痛めつけてポアした、というのは、「カルマ落とし」によってその人のカルマを浄化し、より幸福な人間界に転生させたという意味です。

例えば、A君がB君を殴りつけたとしたら、このとき、B君の今までの殺生などのカルマがA君に移行すると、そうすると、そこでA君はいっそう暴力的になり、そして身体を痛め、解脱に対する道筋が失われるようになると。例えば、A君がB君を罵倒したとしたら、そうすると、今までのB君の口のカルマがA君に移行し、A君のアストラル*5はけがれ、そして本当の意味での神聖な清らかなヴァイブレーションのマントラ*6が唱えられなくなると。しかし、ここで問題になってくることは、もしA君がB君を罵倒しなければならなかったのであると。もしA君がB君の心の働きの中にB君を本当に真理に目覚めてほしいと、本当に真理の実践をしてほしいという心があったならば、倒えば暴力を振るったり罵倒したりしたとしても、A君の心は成熟するであろうと。もちろん、身体を痛めたり、あるいはアストラルを

*1 第二段階目の解脱・悟りの基準は曖昧であり、麻原が信徒の煩悩・カルマの状態を見極めて判断するとされた。なお、前述のオレンジ色の光については、第二段階目の解脱・悟りの際にはばしば体験された。

*2 教団が発行したテキストには「ポワ」と記してあるが、麻原は「ポア」と発音していたので、本書では後者のように記す。

*3 法無我とは、「観念に捉われてはならない」という教え。

*4 本節において以下に引用する説法は、ロヴァジラヤーナコース教学システム教本に収録されている出家者向けのものである。

*5 ここでいうアストラルは、潜在意識と結びついている教義上の世界。音と関係が深い世界とされていた。

*6 マントラとは、宇教的な意味を含む言葉。その言葉を繰り返し唱え、精神に根付かせる。

痛めたり、ケガをしたりするかもしれない。しかし、少なくとも心は成熟するであろう。なぜならば、A君は自分のカルマは行為、例えば殴ると、この行為によって自分の身のカルマはけがれると、例えば罵倒することによって口のカルマがけがれるということを知っているからである。知っているというのは、頭の中で知っているだけじゃなくて、実際に経験しているからである。しかし、もしA君がここでB君に対してそれを行なわなければ、B君は地獄へ落ちてしまうだろうと。A君がそう考えたならば、これぞヴァジラヤーナである。

（一九八九年八月二〇日　富士山総本部道場）

この説法では、「エネルギー交換」による救済が説かれています。つまりA君はエネルギー交換を起こしてB君のカルマを浄化し、B君が地獄に転生するのを防いだわけです。ここでは、エネルギー交換を起こすための働きかけ――あるいはカルマ落とし――はB君を殴ったり、罵倒したりするA君の行為です。

カルマをしようという行為そのものは成立するといえるでしょう。

○○に対して*1ヴァジラヤーナのザンゲを十四時間やらせたことがある。このときに、わたしは二時間指導をしたそのうちの一時間は、ほとんど竹刀で力一杯お尻を殴りつけるという作業を繰り返した。彼女はほとんど蓮華座を組むこともできず、そして経章を読むこともできなかった。そして、泣き続けた。

ところが、三回目からは――三回目から四時間に落として、自分でやらせたわけだけれども――一人で蓮華座を組み、四時間集中し続け、ヴァジラヤーナのザンゲを続けた。そしてわたしはどうなったかというと、叩いた後、そのまま内熱が出――内熱というのは、*2ナーディーに詰まりが起きて生ずるものだが――その熱によって一日苦しんだ。しかし、まあ今まだ少し残ってはいるけれども、マントラ瞑想、あるいは思索をすることによって、抜け出すことができた。○○のカルマがわたしに移ったんだということだ。

そして、*3その状態を自分の中で体得すると、カルマの実体というもの、そして何をなせば救済することができ、何をなさればけれども救済できないのかという実感を持つことができるようになる。

*1 ヴァジラヤーナのザンゲとは、カルマを浄化するための修行法。自らの足を竹刀で叩きながら、麻原やヴァジラヤーナの我に帰依するとのマントラを唱えたり、過去世からの自身の行いを懺悔する経章を唱えたりし、

*2 ナーディーとは、エネルギーが通る管。カルマは管に蓄積し、これを詰まらせるとされた。第二章第二節一一頁参照。

*3 その状態とは、更新となる行為をしたときに、そのカルマがどのように返ってくるかということ。

なります。（一九九〇年三月一三日　富士山総本部道場）

この説法において麻原は、「カルマを背負う」という行為を自身の経験に基づいて説いています。麻原は、〇〇を竹刀で殴りつけたら骨が詰まり、苦しんだと言います。つまり、〇〇を殴りつけたことによって両者の間にエネルギー交換が起き、〇〇のカルマが自身に移ったように感じたのでしょう。一方殴られた〇〇は、できなかった修行ができるようになりました。修行を妨げていた〇〇の悪きカルマが麻原に移ったと麻原は説いているのです。以上の経験をもって、〇〇のカルマを背負ったと麻原は説いているのです。

ここで麻原が説いている幻覚的経験は、前述のように信徒においても日常茶飯事でした。たとえば私は、戦争を積極的に肯定したためるカルトの会員を非難したところ、尾底骨のあたりの首が詰まって心身の不調を招きました。また逆に、麻原から叱責されたときは、麻原との間にエネルギー交換が起き、自身のカルマが浄化されるのを感じました。

ですから一般的見地からは荒唐無稽な麻原のこの説法も、信徒にとっては自身の経験と合致しており、道理にかなったものとして映ったのです。

また私がヴァジラヤーナの救済の教えを受容した背景には、この世の生命よりも、よい転生を重視するオウムの価値観に同化していたことがあるでしょう。私はいわゆる幽体離脱などを経験したので、私たちの本質は肉体ではなく、肉体が滅んでも魂は転生を続けるという教義の世界で生きていたのです。

＊1　一般的には、麻原が説いた根拠のみでは「カルマを背負った」と認められるものではない。一かし前述（第二章第四節九頁＊3）のように、信徒は自身の経験をカルマの法則などと教義の現れとして〝実感〟し、その経験が教義のコンテクストで意味付けされる状態だったので、麻原のこの説法が十分な説得力を持った。信徒はたとえば〝身の上に悪いことが起こると、自身が過去に積んだ悪業が返ってきたものとほぼ〝絶対的〟に感じ、それ以外の解釈はなされない状態だった。

＊2　私が在家信徒時、吉祥寺で千ラシ配り中にカルト会員と話したときの出来事。当時は厳格な不殺生を説かれていたので、殺人が行われる戦争は絶対悪と理解していた。

＊3　第二章第二節五頁＊2参照。

＊4　幽体離脱とは、自身が肉体から離脱するように知覚する体験。

二

「地下鉄サリン関係について……ヴァジラヤーナの教えであるということに関連しては、広瀬証人のみがそのようなことをおっしゃっているという状況がありますので……」

弁護人は検察官の尋問に異議を発し、発言しました。ある信徒の公判に、私が証人出廷したときのことです。すかさず検察官が「それは明らかに誤り」であることを指摘しましたが、弁護人がこのような発言をしたのも、それ相応の理由があるのです。

教団が破壊的活動をした動機として、私はヴァジラヤーナの救済について述べてきました。しかしながら、その動機に関する各元信徒被告人の供述には、かなりの差異が認められるのです。ですから、その差異が生じた原因を検討する必要があると思われます。

事件の指示は、マハームドラーだと思いました。

何人かの元信徒被告人は、そう供述しています。この「マハームドラー」とは、信徒を解脱・悟りに導くために麻原が用いた技法の一つです。麻原はこの技法を、チベット密教の「カギュ派」の法統から導入しました。

今だ迷妄の間にさまよう信徒は、解脱・悟りへの到達を阻げる諸々の要因を内在させています。この悪しき要因を除去するためとして、麻原は信徒に対して様々な"働きかけ"をしました。それがマハームドラーです。

マハームドラーによって除去する対象は、たとえば輪廻の長さにわたって信徒が蓄積してきたカルマです。その場合は、最終解脱者である麻原が信徒のカルマを見極め、それを浄化するために仕掛け章第2節1頁

カルマ落とし"がマハームドラーだといっても差しつかえない*2でしょう。(ですからマハームドラーは、ヴァジラヤーナの教えに包含されるのです。)

ただしマハームドラーの場合は、竹刀で叩くというような露骨な方法は必ずしも用いられませんでした。むしろ、それを弟子に気づかれると効果を失うとされていたこともあり、極めて微妙な操作でした。カギュ派の修行者列伝においては、弟子の知性にとっては理解不能な無理難題を強いられるものとして描写されています。

たとえば、グルであるティローパは弟子のナーローパを、高所から飛び降りざるを得ない状況に追い込みます。それに従ったナーローパは、瀕死の重傷を負います。またあるときは、ナーローパはスープを盗まざるを得ない状況に追い込まれます。そしてスープを盗もうとしたナーローパは、スープをつくっていた人から、また半死半生の目に遭わされます。こうした一連の"仕掛け"の結果、ナーローパに突然、グル・ティローパと同等の解脱・悟りが訪れます。

つまりナーローパにおいて、ティローパのマハームドラー(カル

*1 マハームドラーは特に、オウムにおける第三段階目の解脱・悟りのために用いられた。

*2 第三章第一節三頁参照。

*3 私は極厳修行中、麻原からマハームドラーをかけられていたらしいが、それと気づかなかった。

マ落とし）によって苦痛が生じ、カルマが清算されたのです。また同時に、エネルギー交換（カルマの交換）によって、テイローパの解脱の状態が与えられたのです。*1

このテイローパとナーローパの逸話に、逆法行為を命じる麻原の指示がオーバーラップして映ったのでしょう。その指示をマハームドラーと解釈した弟子にとっては、信徒は一般に、麻原から命じられる無理難題をマハームドラーと解釈する傾向がありました。ですから、逆法行為の指示をマハームドラーと思ったという信徒の供述は、一定の理解が可能です。

ただし、麻原によるマハームドラーと解して殺人の指示に従ったとしても、その信徒は自己の解脱・悟りだけを考えて利己的に行動したわけではないでしょう。信徒の意識の根底には、麻原の指示は究極的には救済であり、信徒に利己的な行為をさせるものでは決してないという認識があるからです。

私を含むCSIのメンバーに関しては、麻原が命じる逆法行為はヴァジラヤーナの救済と認識していたようです。それは前節で述べましたように、麻原からヴァジラヤーナの救済を説かれ続けていたからでしょう。麻原において、CSIのメンバーを意識してヴァジラヤーナの救済を説いていた事実から、この教義によって信徒を教化し、逆法行為に導く意図があったことは明らかです。*2 また元より私どもは麻原から、ヴァジラヤーナの救済であることを明示されていたのです。

なお、私が接していた教義によると、麻原が信徒に命じた逆法行為は、マハームドラーとはなり得ません。マハームドラーには信徒のカルマを減少する目的があるのに対し、麻原が命じた逆法行為は信徒のカルマを増加する結果をもたらすからです。

実際麻原は、非合法活動に従事させた信徒に対し、その行為によって積むカルマを浄化するための修行を課したことがあります。一九九〇年に、猛毒のボツリヌス・トキシンを世界中に散布して人々をポアするための作業を私どもに指示したときのことでした。

私のこのような認識は、麻原の次の出家者向け説法に基づいていました。

ところが、タントラの菩薩というのはね、自己は悪業を積むことになると、しかしそれが、他に対して利をなすならば、それを最高の実践課題とするわけだ。

仏陀の定義を考えてみようじゃないか。仏陀の根本というのは大慈、大悲じゃないか、どうだ。大いなる愛、大いなる哀れみじゃないか、どうだ。たとえ、悪い世界へ落ちたとしてもそれがすべての魂のためになるとするならば、もうすでにそれは

*1 第三章第一節三頁参照。
*2 第三章第一節二頁参照。

仏陀の心の、その人の心の中に仏陀の種子が蒔かれているという答えになるのか、どうだ。（一九八九年四月二七日　富士山総本部道場）

例えば、A君がB君を殴りつけたとき。このとき、B君の今までの殺生などの力ルマがA君に移行すると。そうすると。そこでA君はいっそう暴力的になり。そして身体を痛め、解脱に対する道筋が失われるようになると。（中略）しかし、もしA君がここでB君に対してそれを行わなければ、B君は地獄へ落ちてしまうだろうと。A君がそう考えたならば、これぞヴァジラヤーナであると。（一九八九年八月二〇日　富士山総本部道場）

右記のように、ヴァジラヤーナの救済における行為によっては、「解脱に対する道筋が失われる」と説かれています。麻原が命じる違法行為については、信徒を解脱・悟りに導くためのマハームドラーとは認識しませんでした。その違法行為は、多くの人をポアー一般的見地からいえば無差別大量殺人ーすることなので、それによって積む力ルマは膨大なものであり、力ルマの浄化が必要な解脱・悟りとは到底結びつかないのです。

このように、マハームドラーもヴァジラヤーナの教えの範疇に含まれますが、信徒にとっては、それぞれによってもたらされる結果は相反します。麻原による一指示において、両者は両立する概念では決してありませんでした。

一方麻原は、マハームドラーにせよヴァジラヤーナの救済にせよ、対象の力ルマを背負うことになります。麻原の「神秘的な力」によって対象を救済する点において、両者ともヴァジラヤーナなのです。[*2]

なお、麻原は一九八七年一月四日の説法では、チベット密教のミラレパの逸話について、殺人の功徳によって修行を進めたと解釈しています。この説法に接していた信徒にとっては、麻原が命じた違法行為について、マハームドラーと解釈する余地があるかもしれません。[*3]

麻原において説法の内容が変化したのは、ヴァジラヤーナの救済を信徒に対して系統的に説くにあたり、いかに説くべきか検討したからかもしれません。そのとき、殺人によって積むカルマの問題を考えると、「殺人の功徳によって修行を進めた」とは単純に解釈できないことに気づいたのではないでしょうか。

このようにヴァジラヤーナ関連の説法は、麻原の説き方に変遷がありました。そのため各信徒において、説法に接した時期によってヴァジラヤーナの教義に関する理解の仕方に差異が生じたのです。これが、違法行為に関与した動機が元信徒被告人によって異なる原

*1　教団発行のヴァジラヤーナコース教学システム教本Ⅱより。
*2　第三章第一節三頁参照。
*3　私に関しては、それは入信前の説法であることなどから、信徒時に接したことはなかった。麻原の第一審判決に引用されたものを初めて読んだ。

因の一つでしょう。

また信徒は、教団における立場の違いによっても、違法行為に関与した動機が異なるかもしれません。教団の武装化を麻原から直接指示されていた信徒は、破壊的活動の真意――ヴァジラヤーナの救済――を知らされていました。しかし、そうでなかった信徒は、違法行為の指示について各人が意味付けしていたのです。

被告人はオウム出家者の思考パターンどおりに、武装化を命じられたワークの内容について深く考えなかった。これに比べると広瀬は、小銃製造の目的について多少は具体的に考えている――。これは、ある元信徒（以下、Bと記します）の弁護団が高裁に提出した主張の要旨です。つまり、教団によるマインド・コントロールによって、いわゆる「思考停止」状態で犯行に及んだという主張です。

Bは私と共に一九九三年二月から一九九五年三月にかけて、教団の武装化を麻原から直接指示されていました。それにもかかわらず両者において、違法行為に関与した動機についての供述は対照的でした。教団が破壊的活動に至った動機の解明に深く関係することなので、Bとその弁護団（以下、Bらと記します）による「思考停止」の主張の問題について述べさせていただきたく思います。

始めに、その「思考停止」の主張の真偽性と、その主張がなされた経緯についての検討です。まず、B弁護団による前記主張ですが、これは誤導です。

すなわち、この主張においては、ワークの内容を深く考えないのがオウム出家者の思考パターンと述べられていますが、これはあずしも正しくありません。全証拠を検討すると、Bもほかの信徒もワークの内容を十分に考えていたからです。また私は、小銃製造の目的を考えるべきという問題以前に、それを麻原から知らされていました。もちろんBも。

教団の実態は――麻原はむしろ、与えられた課題の目的・結果を考えるように信徒を指導していたのです。たとえば次は、麻原が出家者に唱えさせた詞章です。

グルはわたしに対して、多くの課題を与える（中略）目的をしっかりとらえ、その目的を記憶修習するんだ。達成の状態をしっかりと考え、そのデータを記憶修習するんだ（中略）次に目的に至るまでの設計図をしっかりと何度も何度も記憶修習するぞ。あるいはてきめんだ。ものに対して徹底的に分析を加え、完成の状態を記憶修習するぞ。徹底的に思索によって完成の状態を記憶修習するぞ。つまり自分自身が考えた設計図がそのとおり使われるかどうか、そのとおりの結果を出すかどうかを、しっかりと思索によって チェックするぞ（口一一月特別決意）

*1 ワークとは、麻原が出家者に与える課業（仕事）。麻原が命じる違法行為も含む。
*2 誤導とは、ここでは、証拠（事実）に基づかない主張をすること。

この詞章は、一九九二年一一月に「師」*1のステージの出家者に与えられ、翌年一〇月には一般出家者のための修行システムにも組み入れられました。

このように、B弁護団の主張は私どもの実態とは乖離したものでした。いかなる経緯によって、B弁護団はそのような主張をするに至ったのでしょうか。

まず、第二審におけるBらの主張は、マインド・コントロール論のいう「思考停止」によって、Bが殺人などに及んだということでした。つまりBにおいて、指示の目的・結果――たとえば、人が死ぬ結果になることなど――を考えず、指示された行為の遂行のみを考える状態だったために、指示に従い得たという主張です。

ここで、「指示の目的・結果を考えない」という見方は、統一協会に適用されたマインド・コントロール論に基づくものです。*2 ですから、B弁護団は、統一協会に適用された理論に合わせて主張を展開していたわけです。被マインド・コントロール状態にある人は一般に、「指示の目的・結果を考えない」ものと誤解して。その結果、証拠（事実）と合致しない主張をするに至ったのです。

また、Bは第一審において、"ポワ（ポア）について、深遠な意味のある行為として納得しようとしていた"旨の陳述をしました。B弁護団も同じ、Bのこの陳述を引用して意見を述べました。さらにBらは、その後の第一審の被告人質問においても、次のような問答をしました。

問　この指示が現在の社会で違法とされているということが分かっていても、その指示を拒否せずに実行しようとするわけですよね。

答　はい。

問　その心境を聞きたいんですけれども、特にあなたの場合、○○の製造にしろ、○○事件にしろ、その目的自体必ずしもはっきり分からないですよね。

答　はい。

問　それにもかかわらず実行している、これは、弟子には分からない深遠な意味があるというふうに思って納得させるわけですか。

答　基本的には、それが全てです。

以上のようにBは、違法行為に係わる状況に直面した場合は「深遠な意味がある」と考えて納得しようとしていたと主張しました。また弁護人も、それを積極的にアピールしようとしていたことが看

*1　師とは、第二段階目の解脱・悟りを麻原が認めた出家者。大師が師に称号変更。

*2　本項記は、オウムで「指示の目的を考えない」状態が起こることを否定しない。私やBの場合、前記の事情から、それを考えることを抑圧する必要がないという趣旨。なお、Bらは「洗脳によって思考と停止」との表現の主張をしたが、マインド・コントロール論を適用したと思われるので、本項記ではその表記とした。

取されます。誘導形式で質問しているからです。

Bらのこの主張ですが、Bと共に武装化に携わった私にとっては、極めて不自然に思えます。まず、ポアについては前述のように、麻原は宗教的経験に基づいて（信徒にとっては）極めて具体的に説いていました。ですから信徒らは、麻原が説くポアをそのとおりに受容しようとするはずです。それなのに「なぜ」Bは「深遠な意味がある」などと納得しようとしたと主張するのか。

また違法行為――殺人・武装化――についても、麻原はそれを正当化するヴァジラヤーナの救済の教義を説いていました。しかも麻原は私やBに対し、教団の武装化がヴァジラヤーナの救済のためであることを口にしていたのです。*1 それなのに「なぜ」Bは指示された違法行為について、「深遠な意味がある」などと納得したと主張するのか。「それが全て」とまで強調するのか。

これも実は、統一協会に適用されたマインド・コントロール論に合わせた主張なのです。つまり統一協会の会員は、教義や上司からの指示に対して疑問が生じる状況になると、「何か深い意味がある」と考え、それ以上の思考を停止するとされているのです。*2,*3 この「思考停止」によって、統一協会に対する疑問が生じないわけです。

Bらは、被マインド・コントロール状態にある人は一般に「深遠な意味がある」と考えるものと誤解したのでしょう。マインド・コントロールにかかると、「深遠な意味がある」と考えるようになるのかを熟考せずに、当の思考パターンは、「ノア家庭の教訓」といわれる統一協会の教義に起因するのです。*2

実際Bらの主張は、マインド・コントロール論に合わせたことを裏付けるように、作為的です。Bらのいう「弟子が分からない深遠な意味」は教義上、何が深遠なのかが明らかだからです。つまり救済の対象のカルマを麻原が見極めていることが深遠なのです。*4 したがって、Bがこの教義に基づく供述をせず、「深遠な意味」をことさらに強調するのは、極めて不自然といえます。

以上の理由から、「深遠な意味がある」と納得したとのBらの主張は事実とは認められません。Bが、弁護人の示したマインド・コントロール論の影響を受け、その理論に沿う供述をした疑いがあります。弁護人が誘導尋問しており、Bにおいて、そのような供述を強くあらためられる状況が存在したことから、それは否定できません。

*1 Bは違法行為を初めて指示される前に、麻原からヴァジラヤーナの救済は説かれていらず、違法行為に向けた教育は受けていなかった。よって、違法行為を初めて指示されたときは、その目的は分からなかったはずだ（Bは検察官に対し、マハームドラーと思ったと供述している）。しかし、一定の理解があったはずだ。起訴された事件に関与したときには、教団が破壊的活動をする目的について「…と自分では善くないことだと思ったとしても（…何か深い訳があるのだということを賢明に悟って、分からずとも）あくまでそれを善いことと見なければならない」旨のもの。（日本自立への苦闘 全国統一協会被害者家族の会編）麻原は「深遠な教え」などと言うことはあっても、「深遠な意味がある」と考えなければならないとは説かなかった。

*3 「青春を奪った統一協会 青春を返せ裁判（東京）」原告団・弁護団編著

*4 麻原は、救済の対象のカルマを見極め、そのカルマを浄化するための指示が可能とされていた。

さらにBらは、犯行時にBが「何も考えられない状態になった」ことを強調しました。たとえばBは第一審において、「上司から殺人を指示されたときに混乱し、様ざまな思いがもののように押し寄せてきて、何も考えられない状態になった」旨の陳述をしました。Bらのこの主張の趣旨は不明確でしたが、「思考停止状態で犯行に及んだ」との主張の一環だったためかもしれません。

しかし、Bは第二審の被告人質問において、上司から殺人の指示を受けたことを否定しました（「自身が殺人を指示されていること」を別の共犯者から聞いた旨を供述しました）。そして、殺人を指示されたことを初めて知ったときの心境について、「かなり唐突な印象を受けた」とは思いますが」と言い直したのです。（このように当時の心境を言い直したのは、第一審判決を否定する意図がBらにあったからです）

第二審におけるこの供述が事実であれば、第一審における前記の陳述は虚構ということになります。このように、「何も考えられない状態になった」というBらの主張についても、信憑性に重大な問題があるのです。*1

「思考停止」に関するBらの主張は、以上のように事実を反映しているとは評価し得ませんが、次にその主張の弊害を検討したく思います。その最大の問題は、Bらの主張のために、教団が破壊的活動に至った動機の解明が阻害されたことです。それは否定できません。

破壊的活動を命じる指示に、「深遠な意味がある」と主張するならば、たとえその指示の真意が分かっていたとしても、それを供述できるはずがありません。それを供述したら、「深遠な意味がある」と思ったという前提――破壊的活動をする意味が分からない――が崩れるのですから。

事実、Bは裁判において、教団が破壊的活動をした動機に関しては、ほとんど供述しませんでした。Bは私と共に約二年間、教団の武装化を麻原から直接指示されています。その会合の場で、麻原は私ども共犯者に対し、教団が破壊的活動をする動機――ウアジラヤーナの救済――についても語ることがありました。私とほぼ同程度、麻原のその言葉を供述できるはずなのです。しかし……

問　○○さんから二回目に、（殺人行為の内容を明らかにされて）承諾している。その理由として「何か深遠な意味があり、救済になる」としているが、深遠とは。

答　分からないから、深遠ということです。

問　救済とは。

答　上からの指示は教祖の指示であり、教祖の指示は救済だった

*1　Bは捜査段階では、「何も考えられない状態になった」とは口にしておらず、供述の変遷の問題もある。

からです。

問　ヴァジラヤーナとは、言われたことをその通りやるということか。

答　そういう面がありました。

たとえば、Bは麻原の公判に証人出廷した際、麻原の弁護人とこのような「やりとり」をしたとされています。Bの全供述を知らないので推測になりますが、Bが証人として、自身の知る事実を率直に供述したのか、私は疑わざるを得ません。その後Bの弁護人が被告人はオウム出家者の思考パターンでおりに武装化を命じられたワークの内容を考えなかったが"旨の主張をしたことから判断すると、Bは供述しなかったはずです。

「指示には深遠な意味がある」などと、統一協会の教義を麻原の公判で披露しても意味はありません。Bは、事件を指示した理由を明らかにしない麻原に対し、自身が知る事実――麻原が語ったこと――を突きつけるべきでした。

――一九九三年の八月頃、教祖が私（B）に対し、「男としてまれたからには天下を取らなければ」と言ったので、私は「はい」と答えました。当時、私は教祖から、大陸間弾道弾の設計を指示されており、その報告の場でのことでした。なお、始めは、上九*1から東京を狙う爆弾に必要な燃料の量の計算などを指示されました。当然のことながら武装化の目的は、日本、ひいては地球上にオウムの国家を建設することでした。

――一九九四年の五月から六月頃、教団の武装化に関する会合の場で、村井が教祖に対し、「A*2 K74の弾は厚さ一センチの鉄板を貫通します」と話したことがありました。そのとき教祖は、「わーは敵喜っているよ。それならジュラルミンの盾など簡単にぶち抜ける」と言いました。教祖は機動隊等に対して、教団が製造していた自動小銃を使用する意図があったわけです。

――教祖は、「（わーの敵の）代で、オウムは大虐殺をするかもしれない」と言いました。*3

――教祖は、「ヴァジラヤーナが成功した後、人々を教化するために、テレビやラジオから真理の情報だけを流せばいいんじゃないか」と言いました。*3

――教祖は、「ロシアでの武器調査は成功した」とか、「ロシアは敵の味方か分からないから、ヴァジラヤーナは自分たちだけでやるぞ」と言いました。

――教祖は一九九四年一二月から翌年三月頃にかけて月一回、科学技術省の有望な若手らを集めて食事会を催しました。その場で、「チベット仏教は武力を持たなかったから滅びた。しかし、オウムは違う。オウムがヴァジラヤーナをすることを、ダライ・

*1　上九とは、教団施設があった山梨県西八代郡上九一色村（当時）。
*2　AK74とは、ロシアの制式自動小銃。これと模倣し、自動小銃を教団は製造した。
*3　一九九四年五月から六月頃の、武装化に関する会合の場での話。

ラマ法王も認めている」*1と言いました。この会合は、教団の武装化に関与させる予定の若者を教育する目的のものと思われます。

……

教団においては、武装化に携わるいくつかの出家者のグループが編成され、麻原はそのグループごとに指示を与えていたようです。私が所属したグループは、一九九三年二月に編成され、そのメンバーは出入りがありましたが、五人前後でした。

しかし、その五人のメンバーのうち、右記のような麻原の発言――教団の武装化を指示する動機・目的――を供述しているのは私だけなのです。ですから、私がそれを供述しても、その直接的な裏付けはありません。

私の供述について、検察官は裏付けを取るために、証人テストにおいてBにも確認したはずです。それでも、Bは話さなかったのでしょう。

元信徒被告人の公判が開始された後、三人の取調官が私に対し、Bはあまり話さないと漏らしました。麻原・教団に対する決別と事件についての反省を表明している元信徒被告人の中で、そのような評価を聞いたのはBだけです。Bにおいて、「思考停止」の主張を維持するために、供述が抑圧されたのではないかと思えてなりません。*2

私はBに対して、共に事実を明らかにしてくれることを期待していました。それを期待できるのは、麻原からの指示を共に受けつつ麻原・教団に対する決別を表明しているBしかいなかったからです。

同席者であるBが供述しないと、私の供述は裏付けられないどころか、信憑性に疑いを差し挟まれかねません（特に、麻原の主張を支持する立場の方には）。そんな話は、実際にはなかったのではないかと。控えめに考えても、公判を傍聴された方にとっては、何が真実か判断し難い状況だったのではないでしょうか。麻原から同時に指示を受けていた元信徒被告人の供述が一致しないのですから。

また、Bは第二審の被告人質問において、教団が武装化した理由に関する認識を検察官から問われ、次のように答えました。

問　被告人は、いわゆる教団の武装化の初期の段階からこの武装化に関与しているわけですけれども、被告人は、教団がなぜ大量の銃を製造するなどして武装化しなければいけないのかということについてはどのように考えていたんですか。

答　・・・本当の意味で、具体的なビジョンと言いますか、そこまでは理解しておりませんでした。

*1　ダライ・ラマ法王に関する麻原の話は事実とは思えない。

*2　Bは、供述すると証拠になるとの教義の影響を受けて供述していないわけではない。

問　その点については、被告人なりに、どのような理解を持っていたんですか。

答　私は、いわゆる武装化等に関係したころには、教祖松本によるハルマゲドン等の説法がなされておりまして、そういったことに関係するんだろうとは思っておりましたが、先ほども申しましたように、具体的な詳細等については理解しておりませんでした。*1

Bはここでも、教団の武装化の動機がアジヤーナの救済であることを包み隠しにと言わざるを得ません。Bがその動機を供述しなかったのは、弁護団による主張に従ったためでしょう。*2 B弁護団は私の供述――小銃製造の目的はアジヤーナの救済の一環で教団が武力を持つことが必要だと受け止めた――を引用し、広瀬は小銃製造の目的について具体的に考えている旨の主張を高裁に提出しました。かかる状況では、Bは私と同じ供述はできないでしょう。「思考停止」の主張を維持するためには、Bは公判において、暗い表情をしていました。それは、裁判における主張を維持するために、質問に対して率直に回答できない状況にあったためではないかと思えてなりません。事実を明らかにしていないことに、引け目を感じていたのではないかと。

また、Bらによる「思考停止」の主張は、信徒の思考・行動の心理学的検討にとってもマイナスだったのではないでしょうか。Bらは、マインド・コントロール論を適用した主張をすることによって、オウムの教義・修行体系に適合した検討を可能にするために、事件の動機・目的に関してどのように認識していたか、事実を明らかにすべきでした。その場合、統一協会に適用されたマインド・コントロール論に基づく検討ではなく、マインド・コントロール論を構成する認知心理学等の基礎のレベルに立ち返っての検討になるのかもしれません。

統一協会とオウムとは教義・修行体系が異なるのですから、統一協会の会員の状態に合わせた主張をしたら、矛盾が生じるのは当然です。どのような主張をするにせよ、事実に基づかなければ正しい結論が導かれるはずはありません。

以上のように、B弁護団による「思考停止」の主張は、一連のオウム事件の核心である動機の解明に悪影響を及ぼしました。他方、

*1　ハルマゲドンとは、教団外部の勢力が起こす最終戦争。その防衛のために教団は武装化していると考えた信徒もいた。しかし麻原は、一般生家者に対してはハルマゲドンを説いていたが、武装化に関する会合の場では、武装化の目的はアジヤーナと言っていた（ハルマゲドンのことを口にすることはなかった）。

*2　一回目の質問に対し回答が食い違っており、Bは「考えていた」ことに関係する回答を避けていたといえる。二回目の質問に対しては通常「ハルマゲドンに関係すると思っていた」（これは弁護団の主張でも認めていた）と、それのみを回答すれば足りるはずだ。しかしBは、「具体的には理解していない」と付け加えたことから、武装化の動機・目的に関係する具体的な供述を避けていたといえる。

そのような主張をするのも、被告人の弁護という観点からは、致し方のない面があるのかもしれません。弁護人には真実解明の義務はないのです。

また、Bについても、厳しく罪に問われている裁判において、弁護団が認めている主張に反する供述はしにくい状況にあったことは理解できます。事件についてBが反省していないということではないでしょう。

しかし――

「なぜ教団が事件を起こしたのか、知りたい」

被害関係者の方々のこの慟哭を、B弁護団もBも直接聞いているはずです。それを考慮するとBらの「思考停止」の主張が妥当なものか、再検討を要するかもしれません。

Bは前述のように、麻原からの指示の目的・結果を考えて（ある）いは知って）いました。これは動かしようのない事実であり、証拠の上でも明らかです。

したがって、Bらがいかに「思考停止」の主張をしても、その主張が通用する見込みはなかったのです。すべての証拠を知悉している裁判所には、証拠を把握していない傍聴されている方々には、何らかの有利な事情があるかのように思わせることはできるかもしれませんが。

このような実質を伴わない形だけの主張ならば、せめてもの償いとして、事実を明らかにする道を選択してもよかったのではないか。そう思わざるを得ません。

また、次の状況から、B弁護団の弁護活動には行き過ぎがあったのではないか、との疑問もあります。

教団による破壊的活動の動機・目的について私が詳細に供述したのは、取り調べ官から繰り返し言い聞かされていたからです。「なぜ教団が事件を起こしたのか、被害者のことを考えて話しなさい」と。*1

ところが前述のように、B弁護団はその供述を引用し、私を不利にするための誤導の主張を裁判所に提出しました。*2 私の事件も係属する裁判所に。

そのほかにもB弁護団は、私を不利にするための虚偽の主張を裁判所に提出しました。*3 たとえばそれは、「広瀬が二三台のMC（自動小銃部品の製造のための工作機械）が必要であると進言したことで、松本が村井にその購入を指示し、丁度建設中であった第一サティアンに設置することが決定されてしまった」との主張です。

*1 そのように取調官から言われた理由は、私が長期間、事件の動機・目的を秘していたから。秘していたのは、それを供述すると高度の宗教的犯罪になるためだった。

*2 小銃製造の目的はヴァジラヤーナの救済のための私の供述を引用し、Bは出家者の思考パターンでおりにつけ内容を考えなかったのに比べ、広瀬は小銃製造の目的を具体的に考えている旨の主張をした。しかし、この主張は、本節四頁に記したように誤導。

*3 B弁護団は私に関して、事実（証拠）と異なる教団以上の主張をした。その数から意図的に虚偽の主張としたとしか考えられない。

しかし事実としても証拠の上でも、私は「進言」はしておらず、村井の指示に従いMCの台数を報告しただけであり、またそのことによって第一一サティアンへのMCの設置が決定されたわけではありません。

要するにB弁護団によるこの主張は、裁判所を誤導するものです。事実以上に、私が自動小銃の製造に積極的に関与し、また大きな役割を果たしたと判断されるように。その一方でB弁護団は、"Bの態度は終始受動的だった"旨を主張しています。

Bの事件は、B弁護団が裁判所に対して私に関する主張をしてもBの刑事責任が軽減される事案ではありません。ですからB弁護団がそれをするのは、私の裁判への不当な介入に過ぎず、不適法な行為です。もちろん、虚偽の主張をして、私に不利な判断をさせるように裁判所を誤導するのも。

このようにB弁護団[*2]は、かなり強引な手法に訴える弁護活動をする性向がありました。不適法な行為もいとわないほど。その性向のために、事実の隠蔽・歪曲に繋がる誤導・誘導をしてまで「思考停止」の主張をしたのではないでしょうか。オウム事件の全容解明を社会が切望しているのにもかかわらず。

*1 B弁護団は第一審の頃から、私の裁判に干渉していた。その態度について、私の第二審のある弁護人は、「広瀬君のほうが量刑が軽くなることを恐れている」と評した。

*2 ただし、Bのすべての弁護人にその性向があったとはいえない。

一九九〇年四月一〇日頃のことでした。「尊師のご自宅に行ってください」と、私はCBI（教団の建設班）のあるメンバーから告げられたのです。

教団前にも私は麻原から彼の自宅に呼び出され、「家族に執着しているか」などと、当時の心境についての質問を受けていました。普段とは異なり、麻原の側近は同席せず、一対一です。この状況でも相変って、そのような話のために、なぜ呼ばれたのか、私には理解できませんでした。

再度の呼び出しに、今度は何だろう〜と思いながら、私は第一サティアン一階のCSIの工リアから、麻原の自宅がある四階へと向かったのです。

麻原の自宅のやや広い部屋には、何人かの出家者が既に集まっていました。最終的な人数は約二〇人。半分以上が古参の大師であり、教団の重要人物も召集されていました。私の同輩もいましたが、その場の顔ぶれからは何のための会合か予想できませんでした。

やがて麻原が、*村井秀夫ら三人の出家者と談笑しながら姿を現し、緊張するような雰囲気ではありませんでした。そして説法用のいつものソファーに身を沈めると不意に私どもに指示しました。

「今からする説法は録音しないでください。メモも他言も無用である」

その意味を深く考える暇を与えられないまま、私は麻原から問われました。

「*サンジャヤ。今、上九でつくっているもので何をするか分かるか」

上九でつくっているものは、少し前に私は村井から、何らかの菌の培養を指示されたことがあったのです。

上九の敷地は、私が生活していた富士山総本部道場とは約七キロメートルの近距離でしたが、高原のため気候の様相は異なり、四月になってもみぞれが降る寒さでした。その敷地内に設置されたトレーラー用のコンテナの中に、村井は私を案内しました。

薄暗い、雑然とした物置きになっている室内の奥のスペースには、私が同僚と作成したばかりの恒温槽（ステンレスのドラム缶製）が据えてあり、菌が既に培養されていました。

「コンテナの中に誰も入れないように」

村井は指示しました。

私の任務は一週間にわたり、恒温槽の番をすることでした。

別の大師からは、六時間毎に槽の中の培養液のペーハーを測定して報告することとまとめられました。また、この作業の際の注意も受けました。培養液が周囲に飛散したら、そこを水酸化ナトリウム水溶液で消毒するように……。

*1 村井は、オウムの科学班のリーダー。麻原の第一の側近であり、教団の破壊的活動において中心的役割を果たした。

*2 サンジャヤとは、「私の宗教名」。一九八九年一一月一七日に第一段階目の解脱・悟りを認められた際、麻原から与えられた。

何事もなく私が任務を終えると、医師の出家者が私に一袋のブドウ糖を点滴しました。「尊師からのイニシエーションです」と。そのイニシエーションには、風邪薬を服用したときのようなしびれを身体に感じたので、薬品が含まれていたようでした。

菌の培養のほかにも、その頃に指示された仕事が次々と私の意識にのぼってきました。*1 衆院選後、教団は本支部を閉鎖し、出家者は交代で、富士山総本部道場における五日間の極厳修行に入れられています。ところがCSIのメンバーは修行に入れられず、至急の仕事を命じられていたのです。

私は麻原から、教団が製作する気球の上昇高度の計算を指示されました。また村井からは、工業用のフィルターの調査と購入を指示されました。菌を大規模に培養し、その菌から何らかの生産物を得るために使用すると。

そのほかの指示も重なり、あわただしく日々が過ぎるうちに教団にも動きがありました。麻原が出家者に対し、四月二四日に石垣島にてイニシエーションを与えると発表したのです。また現地にしばらく滞在し、修行するとも。そして本支部所属の出家者は麻原の厳命によって持ち場に戻り、このセミナーへの参加を在家信徒にも死に呼びかけている状況でした。

この一連の出来事が示す解は、一点に収束しました。

「上九でつくっているものを気球に載せ、撒かれたところにいる生物は、生命の危機にあるのではないですか。そうすると、撒くのは、世界中に撒かれて、瀕します。今度の石垣島でのセミナーでは、イニシエーションとして、その菌に対する抗体が与えられるのではないですか」

現実離れした回答が唐突になされたことについて、奇異に思われるかもしれません。しかしそれが、オウムというコミュニティーでした。閉鎖的環境においてヴァジラヤーナの救済が説かれ続けたために、教団では規範意識が一般社会のそれとは乖離し、その救済人々の生命を絶ち「ポア」することを受け取られていたのです。

――の実行は当然のことと――

果たして麻原は、

「そうか、分かっていたのか」

と、感慨深げに応じました。そして再び私に問いました。

「表面的なことはすべて分かっているようだが、深い意味はどうだ」

「現代人は悪業を積んでいるから上九で培養するのは、カルマ落としをするのですか」

私の回答に触れることなく、麻原は説き始めました。

現代人が悪業を積んでいるために、地球が三悪趣化し、宇宙の秩序が乱れている。それを我々が正さなければならない。これから上九で培養するのは、ボツリヌス菌である。この菌が生産するボツリヌストキシンは、少量でも吸い込むと呼吸

*1 一九九〇年二月一八日の衆院選に、麻原ら教団関係者二五人が出馬し、全員が落選。教団の宗教法人格の取得が妨害されたことにより、救済活動には政治力が必要だと麻原が訴えて出馬した。

中枢に作用し、呼吸が停止する。そして*1サマディーに至り、ボアされる。

このボツリヌス・トキシンを気球に載せ、世界中に撒く。これは、第二次世界大戦中に日本軍が行った「風船爆弾」の方法である。中世ヨーロッパでペストが流行したときは黒死病といわれたが、今回の病は自死病といわれるだろう。

ここで、なぜ我々がやらなければならないのか、*2これは本来、神々がやることだが、神々がやらないから我々がやるんだ。

そして、天変地異を使い、残すべき者を残せない者を地球に転生させて、真理の実践をさせる。

今回の衆院選は、私の*3ハーヤーナの救済のテストケースだった。その結果、マハーヤーナでは救済できないことが分かったから、これからはヴァジラヤーナでいくことだが、私もだいぶ悩んだんだ。これは最初から分かっていたようなことを言っていたよ。*4なあ〇〇、私はこの二週間のワークは精神的・肉体的に厳しいだろうが、この二〇人で行う。*5

かくして麻原は、ヴァジラヤーナの救済の開始を宣言したのです。

いつしか、その場は厳粛な雰囲気に包まれ、私どもは説法に聞き入っていました。

説法中唯一、麻原の感情が動いた瞬間がありました。「この二週間のワークは精神的・肉体的に厳しいだろうが、この二〇人で行う」と。

私どもに語りかけたときです。

その声の波動を聞き、人々が失われることについて、私は一抹の寂しさのようなものを感じました。麻原の心の動きに感応したのようにしかし、その感情はそれ以上、広がることも深まることもありませんでした。

当時の私の様子を間近に見ていた出家者は述べています。

*1 サマディー（三昧）とは、宗教的に高度な瞑想状態。呼吸が停止するとされる。

*2 麻原は本説法に先行して同年三月二四日、「神々が秩序を戻す」と出家者に説いていた。

「人間の魂がもっともっとけがれ、そして第四期、破壊の直前になると、タントラヤーナの修行（オウムでは、煩悩を利用（昇華）して修行する方法とされた）においても救済できない。そういう魂の世界が人間界に形成されます。ここで登場してくるのが、ヴァジラヤーナ、つまりプラース、力を使って、武力を使っての破壊です。なぜならば、この欲六界の、例えば地獄の世界、餓鬼の世界、動物の世界、人間の世界、阿修羅の世界、天の世界、これらの世界は一つ一つ役割があり、その心の働きによって形成されなければならないからである。ということは、例えば人間の世界が動物化したり、あるいは動物の世界が餓鬼化したりすると、その世界の形成バランスというものが崩れます。そして、その世界の形成をコントロールしている神々がいて、その神々がその秩序を元に戻そうとします」（ロヴァジラヤーナコースは教学システム教本p.）

*3 マハーヤーナ（大乗）の救済とは、オウムでは合法的な布教による救済の意味。

*4 このようなことは、ボツリヌス・トキシン散布計画のようなこと。

*5 ここに記したのは、麻原の説法の要約、この順番どおりに説いたかは、定かではない。

この話し合いの中で、麻原氏は、そこに呼んだ三〇名ほどの弟子の中から広瀬氏を指名し「何をどんな目的で作っているか分かるか」という趣旨の質問をしました。それに対して、広瀬氏は「おそらく、毒性のある細菌を作って、世界中に散布しようとしているんだと思います」とその内容を過不足なくあっさりと答えていました。麻原氏の方を見て、言いよどむことなく冷静に答えていた様子をよく覚えています。

同席者の多くは、全員ではないかもしれませんが、私と同様の心理状態だったのではないでしょうか。その後の作業の状況から察しますと、ここで麻原は、ホツリヌス・トキシンを世界中に散布することによって、「アビラケツノミコトになれ――シャンバラの実現のために戦え――」との啓示を行動に移そうと意思したといえるでしょう。そして、縁ある者を残せるべき者を残せないから我々がやるんだ。地球に転生させて、真理の実践をさせる」とのシャンバラの建設を意図し実践する者のみが住まう理想国家、つまり一九八八年一の月二八日の観点上ていたことがうかがえるからです。また、シャンバラの実現のためのアビラケツノミコトであることを高い種、これを残すことがわかった説法においても、自身がアビラケツノミコトと軌を一にする考えを述べているかシャンバラを地球上の「役割」のかもしれない」と、自身のみを生き残らせ、麻原はオウム関係者のみを生き残らせようとしたのです。

このヴァジラヤーナの救済を麻原が行動に移したのです。

実現しようとしたのヴァジラヤーナの救済を麻原が行動に移した

一方ヴァジラヤーナの救済の実行については、衆院選出馬の前から一貫して麻原の念願にあった可能性は否定できません。事実、麻原は一九八九年七月に衆院選出馬を出家者に発表した後も、ヴァジラヤーナの救済を説き続けていました。特に同年九月二四日には東京本部道場（世田谷）において、当時としては例外的に、在家信徒にまでポアを説いたほどです。*1 ですから、麻原は政界進出を目指しつつ、ヴァジラヤーナの救済を意思していたのかもしれません。

麻原は説法を終えると、私どもの一人一人に任務を与えました。上九にプレハブ棟を建設し、その中にボツリヌス・トキシン生産プラントを製作するのはCBIの担当。プラントの設計とプラントの制御盤、AM放送局程度の出力の送信機（電話等が不通になることを想定しての通信用）、気球の各製作は主にCSI。ボツリヌス菌の大量培養のための種菌の準備は主にCMI（教団の医学班）。ボツリヌス・トキシンの各生産工程、すなわち菌の大量培養（容量10m³の培養槽×四基）、トキシンと菌との分離、トキシンの乾燥・粉末化に関係する作業は主に大師。*2 私は菌の大量培養の責任者を命じられました。

また麻原は、「このメンバーは、石垣島へは行かない」と明かしました。石垣島でのセミナーは、教団関係者の避難が目的だったのです。ボツリヌス・トキシンを搭載した気球は偏西風に乗せて拡散する予定でしたが、石垣島は偏西風の経路から外れているわけです。この計画の従事者は、セミナーが開催されている頃に気球を放つ段取りでした。*3 後、富士山総本部道場に用意された気密室に避難する段取りでした。

この会合の最後に、麻原は私どもに「直ちに作業にかかれ」と指示しました。その号令に従い、私どもは時を移さずに任務に就いたのです。普段と変わりなく。

*1 密教の戒によると、麻原が説いたヴァジラヤーナの救済の類の教えは、それを聞く資格のない者（聞くとその教えを誤解する可能性がある者）に対して説くと、説いた者は無間地獄（最も苦しい地獄）に堕ちるとされる。その為麻原は、その教えを在家信徒に説くにあたっては、（多少は）慎重な姿勢を見せていた。

*2 麻原が大師を作業員として選んだ理由は、この計画は宗教的行為なのだ、宗教的に高ステージの者が従事すべきと判断したからだろう。大師のステージに達していない者は、所属がCBI・CSIなどであり、技術者としても必要とされた。

*3 実際は、作業現場の安全対策は杜撰であり、ボツリヌス菌の培養に成功していたら、私どもが真っ先に死んでいただろう。一滴も作業に携わる頃には効果が消失するとされていた。

質問に対するコメント

本記文から離れ、これまで私が受けた質問に対してコメントさせていただきます。

一、オウムが事件を起こしたことについて、社会の側に何らかの要因があったと思うか。

オウム関係者が事件を起こしたとされていただきますと本質的に、社会の側にはその要因はなかったと思います。当の動機が、社会の状況などとは関連がなく、オウムの教義上の宗教的問題だったからです。

すなわちオウム関係者は幻覚的経験によって、教義の世界観を現実として知覚しており、教義上の救済と認識して事件を起こしました。教義では、一般社会の人々は悪業をなしているために、来世は苦界に転生するとされていました。その人々を「ポア」―人々の生命を絶ち、より幸福な世界に転生させること―によって救済することが、事件の動機だったのです（第三章第一節参照）。この動機に、社会における現実的な状況との関連は見出せません。

二、違法行為を命じる麻原の指示に従うにあたり、信徒には葛藤があったか。

すべての信徒ではないかもしれませんが、ほとんどの信徒が葛藤なく指示に従ったのではないでしょうか。それだけ完全に、信徒は世界観―価値観や規範意識を含む―が教義に沿うものに変容しているように見受けられました。

例として第一審時に私は、地下鉄サリン事件の共犯者の仏刹に証人として出廷した際、弁護側と次の問答をしました。

問　リアルなテレビとか映像で被害に遭っている人の状況が映し出されるときに、何か感じなかったのですか。

答　そのときは、まだ教団の考えに完全に染まっていませんでしたので、オウム真理教と縁ができて、早く救済されてほしいなということは思っていますが、普通の人が考えるようなことはまだ余り考えていないのではないかと思います。

問　そうすると、その当時はまだ自分としてはオウム真理教のヴァジラヤーナの実践あるいは救済という考えについて取りつかれていたというか、そういうふうな考えが正しいと思っていたということですか。

答　はい、そうです。

私が供述したのは、地下鉄にサリンを発散させた後の集合場所で、

事件の報道をテレビで視聴したときの心境です。私のその心境は、共犯者の陳述――その報道の視聴中に、私が共犯者に話した内容――によっても明らかになっています。

このように、誠に非道なことでしたが、私は葛藤なく麻原の指示に従っていました。しかし第一審時には、それを供述するのに抵抗がありました。葛藤がありました。地下鉄に乗車していた女子中学生がサリンの被害に遭うことについて、葛藤がありました。しかし実際は取り調べ中に、「それのような女子中学生がかわいそうだから車両を換えた」ということ（は思っていません）。「お前、警察官を驚かせてしまったことがあったのだ。」と述べ、「お前、随分はっきりものを言うな」と。（なお、この事実に関しては、私は第二審で供述しました。）

以上のように犯行当時の心理について、私は相矛盾する供述をしていました。その状況は、全員ではないかもしれませんが、多くの元信徒被告人に共通するようです。やはり言いにくいことなので、元信徒被告人は実際より、葛藤があった旨を供述する傾向が見られます。裁判では、信徒の犯行当時の心理状態は正しく再現されませんでしたからです。その為に、関係者が元信徒被告人の心理を検討するにあたり、支障を来たしているように思われます。

三、麻原は詐病か。

私は個人的には、詐病ではないと思っています。

平成八年一月七日、私は証人として、麻原の公判に出廷しました。その日初めて麻原の顔を見たとき、私は驚愕しました。その瞬間、麻原が精神に異常を来したことを私は悟りました。見た者の背筋を寒からしめるあの表情は、いかなる役者も演じ得ないでしょう。

その体験がありに強烈であるがゆえに、麻原が精神を患っていることを私は疑えません。ただし私は、精神病を診断できる技能は持ち合わせておりませんし、ましてや麻原の訴訟能力の有無を論じられる立場ではありません。

四、オウムに入信する契機となった宗教的経験について、現実として感じたと述べているが、そのような経験は、誰もがそのように感じるのか。

感じるようです。その経験は「突然の宗教的回心」といい、人が葛藤状態にあるとき、などに起こるとされています（前出ジェイムズ）。突然の宗教的回心においては、幻覚的な宗教的経験が自然発生的に起き、その経験者は急激に宗教的観念を受容して思考・行動体系が

一変します。

私は一九八八年二月頃から麻原の著書を読み始めましたが、同年三月八日の夜中に突然、身の上に宗教的経験が起きました。宗教的経験が誘起されるオウムの行法を試みたのにもかかわらずです。その経験は私にとって、オウムの教義の世界の現出として認識されました。その経験は私にとって、オウムの教義の世界の現出として認識されました。その為に、私はオウムに入信したのです。

突然の宗教的回心に関して、研究者は次のように述べています。

すべての回心者は疑いの余地なく、無信仰の状態から信仰深い状態になった。回心者は神学的体系や社会的システムの全体を無垢に受容する。自身の宗教的経験を検討し、疑う動機を奪われる。過度に、非理性的に強い信念を抱く。（John P. Kildahl, 1965, The Personalities of Sudden Religious Converts, Pastoral Psychology, September, 37.）

回心は超越体験が起き、そして非常に逸脱したビリーフ・システムが受容される特徴がある場合、現象論的には、明らかなストレス源があり、以前に重い精神病理がない短期間の反応性精神病に似ているようにも見えるかもしれない。最終的に、心理学者が評価しなければならないのは、宗教的回心によって、その患者がより建設的な行動や安定した社会的行動に至ったか、あるいは奇妙な破壊的な適応に至ったかの範囲までである。（Marc Galanter, 1996, Cults and Charismatic Group Psychology, In Religion and the Clinical Practice of Psychology, American Psychological Association.）

これは次のような趣旨です。回心者は幻覚的経験をし、常識から非常に逸脱したビリーフ・システム（思考・意思決定の仕方）を受容する――たとえば非現実的な教義体系を受容し、その教義に基づいて思考・意思決定をするようになる――場合がある。また、逸脱したビリーフ・システムが共有される集団の思考・行動様式に適応し、以前の生活を破壊するような奇妙な思考・行動をするに至る場合がある。

精神科医が突然の宗教的回心によって、ファンダメンタリストの宗教的信条を受容する――常識に反する教義でも、その字義どおりに信じるようになる――ケースも、研究者は論じています。精神科医は回心を契機に、ファンダメンタリストの信条が共有される集団に加入し、その集団の影響によって精神科医としての規範意識や行動が変容したと報告されています。

クリスチャン・サイカイアトリーは、福音主義のクリスチャンである精神科医の全国的な運動だ。たいていの信奉者は正式な信者になっていないが、この運動の方向は、クリスチャン・

メディカル・アンド・デンタル・ソサエティーが信奉する信条に表れている。最近、この団体は会員に七五〇〇人の健康衛生専門家を数え、そのうち二六〇人は精神科の研修訓練中の精神科医か医者である。志願者は次のことを認める誓言に署名しなければならない。

「神の言葉としての聖書の究極的な権威：そして救済された者に対する永遠の祝福と救済されなかった者に対する永遠の罰」

我々がクリスチャン・サイカイアトリーの信奉者のサンプルを調査して分かったのは、身上調査と習慣に関する変数から、大衆より全般的に強い宗教的志向であることだ（ギャランター、ラーソン、ベンストーン、一九九一）。しかし、この後者の違いが考慮されるべきなのは、これに匹敵する――たぶんより大きい――精神科医一般と大衆全体との間の信念における相違の観点からである。精神科医の五六％が不可知論者か無神論者であると知られている（アメリカン・サイカイアトリック一九七五）のに対して、一般大衆の五％のみが神や崇高な力を信じている（レリジョン・イン・アメリカン一九八五）。精神科医において宗教的な事柄に対する関心が一般に欠除していることは、ラーソン、パティソン、ブラザー、オムラン、カプラン（一九八九）が行った主要精神医学誌の調査でもまた明らかであり、この調査によって、出版された論文の三％しか宗教に関する定量化された変数を含まないことが明らかになった。この割合は宗教的信念がいかに広がっているかを、また精神病理とサイコセラピー的リハビリテーションの両方に関連する心的問題に宗教的信念が影響しうる程度を考慮すると、かなり小さい。精神科医の信念とその患者の信念との相違は、クロールとシーハン（一九八九）も最近の研究において強調している。この研究では、入院した精神病患者の集団の九五％が神を信じ、それに匹敵する大きな割合の患者が神に関連する宗教的信念を信奉することが分かった。

しかしクリスチャン・サイカイアトリーの医者が精神科の業務における処置に組み入れる宗教的信念は、患者の信念に対する気遣いの段階を超えるにあたり、このような段階を超えるにあたり、同業医は公認の専門トレーニングで学んだ治療法の規範から離れないようにしなければならない。この変容は、述べた宗教的な影響のモデルを頼りに理解できるかもしれない。我々の研究によって、会員の強度の宗教的経験が情緒的苦悩の除去をもたらすことが分かった。これがグループに係わる原因として最初に働いたのだが、二度生まれ*1の経験をしたと述べた。実に、応答者の九五％が、典型的に、生来事の後に苦悩や症状が減少したが、この経験は我々の応答者も報告した。このとき、プラス*2メンタリストの宗教的準拠集団*3は、メンタリストの宗教的準拠集団は、行動と変化させる認知的な枠組を与えられた。この準拠集団は

える。我々の応答者は、強固に保持される一群の信条を信奉するようになったが、この信条は聖書に根差し、二度生まれのクリスチャンが奨励するものだった。集団で共有されるこの信条によって、彼らは新しい行動基準を受け入れることが是認された。この回心者たちは最終的に、凝集力の強い集団に携わるようになった。この集団は彼らに、運動組織との係わり合いを維持させ、また集団において一致している規範を受け入れさせた。我々の応答者について、凝集力が非常に強く、前述のカリスマ的・カルト的な若者の運動組織に我々が見出した結果に匹敵することが、凝集力の測定によって明らかになった。このことが説明するのは、信念の転換の原動力と、その転換に続く、行動を深く形成・強化する凝集力の強い集団における帰属の原動力である。（前出 Galanter）

＊1　二度生まれとは、突然の宗教的回心。

＊2　ファンダメンタリストとは、不合理なことでも、字義どおりに経典を真実と信じる信仰形態を持つ人。

＊3　準拠集団とは、人が自分を関係付け、その成員の態度をとろうとする集団。

＊4　凝集力とは、成員を集団に携わらせ続ける影響力全体。